

## 「アーツ前橋 研究紀要」の発刊にあたり

このたび、2013年の開館以降、念願だった研究紀要を発刊することになりました。開館の準備、そして事業の運営に追われ、なかなか手をつけることができませんでしたが、なんとか忙しい時間をやりくりして執筆と出版を実現した同僚たちに変感謝しています。

ご覧になっていただければ分かるように、掲載論考はそうした日々の業務を糧に書かれたものです。作品や資料の収集、あるいは展覧会/教育普及などの事業において調査及び実施した報告を、できるだけ美術に関心を持つ多くの方々に提供するがこの研究紀要の第一の目的です。図録や年報といった刊行物では十分に伝えられない情報を他の研究者の皆さんと共有できれば幸いです。読者の皆さんからの、様々な反応や指摘を歓迎したいと思います。

「田中青坪 院展出品作リスト」、「『表現の森』の始まりと2年目の活動を通じて考えたこと」、「アーティスト・イン・スクール 教科のあいだに広がる想像力」は、実施した事業をもとに各担当者が調査や思索を深めた成果です。また、「近藤嘉男と戦争 ―遺稿集『音と灯』を検証する」、「煥乎堂の文化事業」は収集作品や資料と関係した調査を拡充させた成果になります。なお、「煥乎堂と煥乎堂ギャラリーの歴史」は元群馬県立近代美術館学芸員の染谷滋さんにご参加いただいている調査をもとにご寄稿いただきました。各事業や調査にご協力をいただいた個人や団体にも深く感謝申し上げます。

学芸員の仕事とは、作品や資料などだけでなく、それらに関係する人たちも含めた広い意味での一次資料と関わり続けることです。現場から生まれる問いや発見によって、いつも考えるべきことを更新させていくような循環が続きます。この研究紀要は、そうした実践と思考の間をめぐる循環においてきっと大きな意味を持つメディアになるはずです。

おそらくしばらくは不定期の発行になると思いますが、この小さな刊行物の歩む道は、前橋という地域に根ざしながら美術について叙述していく実践を豊かにしていくことにつながると確信しています。

2018年3月

アーツ前橋館長  
住 友 文 彦

## 目 次

|                                       |         |    |
|---------------------------------------|---------|----|
| 近藤嘉男と戦争 ―遺稿集『音と灯』を検証する……………           | 吉 田 成 志 | 1  |
| 「表現の森」の始まりと2年目の活動を通じて考えたこと ……         | 今 井 朋   | 11 |
| アーティスト・イン・スクール 教科のあいだに広がる想像力<br>…………… | 小 田 久美子 | 19 |
| 田中青坪 日本美術院展覧会出品リスト……………               | 辻 瑞 生   | 27 |
| 煥乎堂と煥乎堂ギャラリーの歴史……………                  | 染 谷 滋   | 41 |

# 近藤嘉男と戦争 ―遺稿集『音と灯』を検証する

吉 田 成 志

.....  
君の晩年の二作は「戦争」であり「戦場」であった。この画題から想像される事は、君の苛烈だった戦争体験があれから30余年たった今にも、君のなかに生きていて、何かを追求し、訴えようとした君の純粹性の発露があり、研ぎすまされた芸術家としての時代感覚から来た先見性ではなかったろうか。  
(中略) 我々戦中派は戦争と運命を一つにする世代であったし、その戦争体験の革新は何よりも戦争の悲惨さの実感にある。

中野 一

所収 『音と灯 ―近藤嘉男の遺稿―』1981年11月16日発行、私家版<sup>(1)</sup>

.....

はじめに

近藤嘉男は1915年、県内有数の砂糖問屋「朝野屋」を営む近藤半造の長男として生まれ、小学生のころからピアノやバイオリンを習い、油絵を始め、1934年に白日会に入選。同年、父・半造が亡くなり家業を継ぐ一方、1936年には21歳で二科展に入選した。また同じころ「馬酔」という俳号で川柳を詠むなど、多芸多才であった。戦中は1941年に応召し、中部太平洋地域のトラック諸島に従軍している。復員後の1947年に二紀会春季展に出品し「春季展賞」受賞。同年に二紀会会員に推挙され画家として歩みはじめる。また作家活動ばかりでなく、1949年に自宅で児童を対象とした絵画教室ラ・ボンヌを開設した<sup>(2)</sup>。

現在紛失してしまった資料も少なくないが、遺族が運営する広瀬川美術館には近藤が記したいくつかの日記やスクラップブックが保管されておりこのたび調査に至った。手書きされたそれらを見ていくと彼の几帳面な性格がうかがえる。ラ・ボンヌの経営に関してもカリキュラムから年間スケジュール、会計簿まで手作りでデザインされており、外遊などは出発前に決めた旅程にカラーペンを使い定規をあてた綺麗な表で丁寧に書かれている (fig.1)。手帖に書かれた日記やメモについても、現在確認できるだ



fig.1 「ヨーロッパ渡航記」1964年

けで戦後から晩年の1970年代半ばまで13冊が残されており、渡欧期の記録や近藤の思索、クリッピングなどが集められたスクラップブックは、手書きメモの記載もある写真アルバムを含めて15冊が残されていた。しばしば日記にも旅先でスクラップブックを作る為の道具を買い揃える様子が記されており、現存する以外でもかなりの数の日記やスクラップブックなどを作っていたことが想像できる。

小論では『音と灯 ―近藤嘉男の遺稿―』を中心に近藤の従軍期に焦点を当てる。そのきっかけとなったのは日記およびスクラップブックから、近藤が晩年に再び戦地に赴いていることを発見したと、エピグラフに挙げた中野一が指摘している近藤晩年の二作である<sup>(3)</sup>。近藤は晩年に難病を患い、身体が自由が利かなくなる。なぜこのような過酷な状況のなか、「戦争」を画題に選んだのか。小論はその手がかりを残された日記やメモ、スクラップブックから考察し、近藤にとっての戦争体験とはいかなるものであったか、またその後の画業への影響について究明する試みである。

## 遺稿集『音と灯』とその内容

『音と灯 ―近藤嘉男の遺稿―』(以下『音と灯』)は、近藤没後に妻・久江によって刊行された。内容は、主に従軍中の体験を綴った『小品随筆集』(fig.2)と従軍中に書かれた詩をまとめた『白い枯木』、本

土帰還後に書かれた詩集『廃都にて』、青年期から戦後の日付が付されている詩集『夜の洗濯船』、晩年に久江とともに作った歌「小リスの夜」が収録されている。そのうち『小品随筆集』、『白い枯木』、『廃都にて』は近藤の自筆・自画・自装幀本、『夜の洗濯船』はスケッチブックに自筆・自画で清書されている。残念ながら『廃都にて』と『白い枯木』は現在紛失しており、『音と灯』に原本複写が一部掲載されるのみであるため、ここに収録されている内容以上のことは分からない。そのため小論も『音と灯』に収められている手記にそのほとんどを頼らざるを得ないが、改めて同書を一字ずつ追っていくと、ここから判明できることも多いということがわかってきた。例えば同書21頁・10～11行に『二月十七日の二の舞』と、先刻から来てゐた海軍が答へる。地上掃射も熾烈を極めて来る。(中略)四方の島から地響きが伝はつて来る。爆撃が開始されたのだ。」という記述がある。これは4月30日と付された「靖国神社祭の日の空襲」の一節である。年は記されていないものの、この日付を参考に戦史記録を調べると昭和19年2月17、18日にトラック島を守備していた日本軍に大損壊をもたらした米軍機動部隊200機による大挙来襲を指し、同年4月30日には1日で延べ2200機の米機が来襲した、まさに2月の二の舞となる甚大な被害を及ぼした記録と一致する<sup>(4)</sup>。つまり近藤が残した言葉やスケッチから、二次資料として戦史記録を照らし合わせることで、言葉の意図や紛失したスケッチを立体的に浮かび上がらせることができるのではないかといいことだ。

## 文化人と戦争のかかわり

まず当時の文化人が戦争とどうかかわったか概観を示したい。もっともよく知られている戦争と文化人とのかかわりでは藤田嗣治や小磯良平などが徴用されたことで知られる「従軍画家」ではないだろうか。前橋では画家・住谷磐根（群馬郡国府村生まれ・

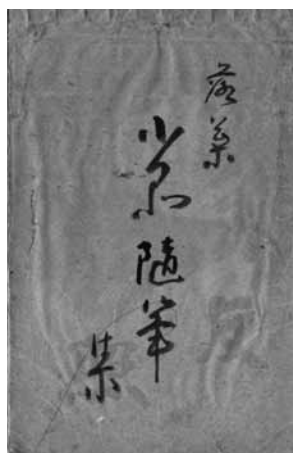


fig.2  
近藤嘉男自筆自画自装幀本  
『小品随筆集』

1902～1997) が従軍画家を志願し二度前線へ立っている<sup>(5)</sup>。もうひとつはドイツの宣伝中隊“PK (Propaganda Kompagnie)”を参考にして組織された「陸海軍報道班員」である。昭和16年10月より文化工作を目的として文化人を対象に徴用された<sup>(6)</sup>。これは評論家・大宅壮一や井伏鱒二ら小説家、月原澄一郎など歌人や作曲家ほか劇作家、デザイナー、漫画家、新聞記者などさまざまな分野の文化人が徴用され、そのなかには陸軍報道部事務嘱託という立場で林芙美子ら女流作家も含まれていた<sup>(7)</sup>。本県ゆかりの人物では小説家・郡司次郎正（佐波郡伊勢崎町生まれ・1905～1973）が昭和17年3月に陸軍報道班員としてジャワ・ボルネオ方面に赴いている<sup>(8)</sup>。最後に軍属、特派員、召集令状に応召した文化人たちがいた。近藤はまさにこの一兵卒として応召した。地域ゆかりの作家では、近藤より10歳年長で戦争画も残した中村節也（邑楽郡長柄村生まれ・1905～1984）も同様に一兵卒として従軍している。中村は昭和5年に幹部候補生として同輩の作家・白井吉見とともに高崎市所管の歩兵第15連隊に入営し、太平洋戦争下で3回応召している<sup>(9)</sup>。

## 会寧への応召から南方戦線まで

近藤が応召から南方戦線へ従軍するまでの記述に基づき、その背景を確かめていきたい。正確な月日は残されていないが、『音と灯』収録の「輸送船日誌」3月16日の記述に「昭和十六年の夏応召の為白根の山から故郷への帰路、霧のふる谿道を下り乍ら「死」のことばかり考へてゐたものだ。それから會寧における二年七か月の歳月が巨き諦念に似た自分の内なる意思を強固な目的と何ものをも破砕する体力とを結びつけた。」（同書P10）とある。最初に配員されたのが会寧であり、この記述が昭和19年であることがわかる。『音と灯』には会寧駐屯時の昭和18年8月13日の日付で《会寧の頃》と題されたスケッチが収録されている（同書P49）。これを戦史記録と照合すると、会寧に駐屯していた部隊は歩兵第19師団第75連隊とあり、近藤が所属した連隊が判明する<sup>(10)</sup>。これを裏付けるように、同じく「輸送船日誌」3月22日から中部太平洋方面・トラック諸島へ向かう記述がある。「目的地トラック迄余す48時間である。木更津沖で集結した船団は虎穴に突入しつつ分進又分進より弱体となって挺進する。(中略) 今月の三日以来の不眠不休はどの兵の眼もくぼませ、

陽やけした顔に夜目にもわかるほどに髭を生やした死、死、死、は目の前にある。」(同書P12) このころ守衛に立たされた日本軍は、昭和18年9月に絶対国防圏を設定し、翌年3月より中部太平洋方面防衛強化のため「松輸送」と名付けられた、陸海軍の増員および軍需品等輸送を開始した<sup>(41)</sup>。トラック諸島は太平洋のほぼ中央、絶対国防圏の東端に位置し、東松船団が向けられた。近藤が所属していた歩兵第75連隊(会寧)は昭和19年2月25日、同じく朝鮮半島に駐屯していた第73連隊(羅南)、第76連隊(羅津)、山砲兵第25連隊(羅津)、工兵第19連隊(会寧)からなる第8派遣隊を編成し釜山港に集められた。同港を出帆したのが昭和19年3月3日であった。その後、近藤を乗せた対馬丸は東京湾に寄港し「東松2号船団」に編入、12日に同湾・木更津沖を出帆して24日から25日にトラック諸島のうち夏島に上陸した<sup>(42)</sup>。

トラック諸島は大正8年に日本の委任統治領となり外部を環礁に囲まれた天然の要塞でもあった。昭和17年8月より連合軍の攻勢が始まると、日本軍は連合艦隊を国内からこのトラック諸島に移し、戦艦大和など主力を集結させていた<sup>(43)</sup>。近藤はこの派遣隊に選ばれたことを「編成のなかに僕の名を見出した時から僕はより元気に魚の尾の様に敏活に動き初めた。」(同書P10)、「會寧を出るとき僕は故郷と縁を切ってきた。」(同書P12)と記しており、作戦への意欲と覚悟をもって参加したことが伝わる。

### トラック島上陸

トラック諸島・夏島に上陸した第8派遣隊は、揚陸作業を終えた後、数隻の舢舨<sup>はしけ</sup>に分乗し各守備地域へ向かった。近藤の行動については「初めて月曜島にゐた時の爆撃のとき、…」(同書P18)と、上陸当時の小隊長のエピソードを語っている点から最初に月曜島に配備されたと思われる。また同じ「島の空襲」から「月曜島の島かげをもうそろそろ空襲のありさうな頃だなどと思い乍ら眺める。」(同書P14)という記述があり、上陸後しばらくして月曜島を離れたこともわかる。続いて「四季島、楓、芙蓉の島々が一目に望められる。(中略)その白い波の列の上に右から冬、秋、芙蓉、楓、夏、春の島々がレビューのどんちやうの様に明るい星空にくつきりと望められる。」(同書P14～15)とその後の記述から、四季島の西に位置する火曜島もしくは金曜島からの記述

と思われる。近藤の1975年8月から11月までのスクラップブックに、丸山善吉(元・陸軍大尉)よりトラック諸島へ慰霊に訪れた時の写真が残されている。その写真を見ると「伊集院兵団金曜島戦没者慰霊之碑」<sup>(44)</sup>の前で撮られた写真があった。これらの写真と近藤との関係を裏付ける資料は見つけることができなかったが、月曜島上陸後、金曜島に配備されたのかも知れない<sup>(45)</sup>。

### トラック島での足取り―飢餓と病

昭和20年4月10日記述「随想」では以下のように綴られる。「ここでは階級が三度の食事に迄及ぶ。階級がにくい。(中略)栄養失調の患者を前にして、自分が絶食を命じた兵の前で、自分とその兵の分と2人前を喰ふ。喰らふ階級に物を云はせて破廉恥を公然とやる。(中略)10人で分けて足りない食物を、階級で按分配当する。1人で半分食べて、あとの半部分を9人にくはせる。」(同書P25)トラック諸島では飢え死にした者が空襲で亡くなった兵士よりはるかに多く、生きていた者も餓死寸前だった<sup>(46)</sup>。ここでもう一つ注意すべき点として、「栄養失調の患者を前にして・・」とある。すでにここでは病気に罹っている様子がうかがえる。「眸に新たなること(退院して)」と題された記述が昭和20年4月22日の日付が付されていることから、その前に病に罹り入院していたことが予想できる。また日付がない「新たなる進発に当りて(或る日の手記より)」では「ワイレスより病名が変つて2号病室に移り、更に1号病室に移つて70日、院長殿の厚意に依つて夏島に来了。1年振りで見の前に現れた夏島は、僕の生涯の最後の樂園としてふさはしいものであつた。」(同書P43)と書かれているが、これらの記述が近い時期であったと考えて字義通り受け取ると、昭和20年4月の1年程前、つまりトラック島へ到着後間もなく体調を崩して入院しているような記述とも受け取れる。同書収録の「心」や「無題」など、この間の日付が付されている随筆や詩も散見できるが、先に紹介した「輸送船日誌」、「島の空襲」、「靖国神社祭の日の空襲」を除くと細かい戦場描写が極めて少ない点から、昭和19年4月30日の空襲の後、入院していたとも考えられる<sup>(47)</sup>。

### 復員時期

詩集『白い枯木』に収録された「冬枯」に「国立

富士病院、昭和二一・一・二三、朝」と記されている。近藤が戦地から帰還した頃を知る最初の日付である。戦史記録にあたると、米艦「LST502号」による帰還輸送が昭和21年1月5日にトラック島を出帆し、同月15日に浦賀に上陸している。おそらく近藤はこの航程で帰還したと思われる<sup>88</sup>。「昭和二一・三・六、ひる」と付されている「自序」に「明後日の朝、上野駅頭に佇んだらう その日が四年八ヶ月の永い旅の 最後の日だ」（同書P82）とも記されているが、前述の昭和21年1月の記では国立富士病院にいたことと、富士病院での様子が書かれる「友情」に戦友との会話があることから、浦賀上陸後そのまま山梨県にある国立富士病院へ入院したようだ。

### 近藤の戦後

近藤にとって戦争体験は、飢餓と病、そして理不尽な階級間の処遇に苦しみぬいた様子が伝わる<sup>89</sup>。『白い枯木』からはトラック諸島の美しい風景描写を描きながらも、常に迫り来る死の予感を吐露している。辛うじて生き延びたものの入院を余儀なくされ、郷土は焼けた野原となり自宅は爆撃によって消失し家財を一切失ってしまったことから、戦後の近藤が言い得ぬ孤独に晒されたことも想像に難くない。一方で従軍を通してその後の創作活動にも大きく影響を及ぼす体験があった。「第一病院での収穫は、何と云つても詩人としての確信を得たことである」、「私はここで初めて作らうとして詩を作った/詩でなければ表現できない/特殊の感情を遺したいからだ(昭和二一・三・六、ひる)」(同書P82)

戦後画業を開始した近藤は、工場や荷車など産業社会を象徴する街並みと労働者や主婦など戦後の都市生活をモンタージュ風の画面構成で描いた。近藤が慕っていた二紀会の画家・宮本三郎(1905～1974)は戦後画業を始めたばかりの近藤の作品を雑誌『アトリエ』誌上で高く評価した<sup>90</sup>。宮本は野田英夫らの様式を踏まえた上で「詩人的なロマンを描きあげる。」と評し、ニューヨークのモダンアートミュージアムの館長が近藤の作品を見て、グロスに似ていて面白いと言ったことを受けた宮本は「このグロスの道を歩む画家が日本には他にないのだから、それだけでも珍重されていい訳だ。而もこの方向が戦争中の君の体験に深く根ざし、帰還後の君の思考の方向を決定している以上、君の将来は或る程度確定

したものと判断していいと思う。」ここで宮本が、近藤の作品に戦中の体験が影響を及ぼしていることを見抜いている点に注目したい。この時期に近藤は日本絵画の方向性について「私は現在日本の進む道は、アメリカイズムでもないし、共産主義でもないと漠然と感じてゐる。それは日本絵画の進む方向と酷似してゐる。絵の進路も、アバングルドでも、古典でもなし、又ピカシズムでもあり得ないと思ふ。/新しいリアリズム、それは敗戦日本の悲惨な現実の中から生れ出づるものであると私は信じてゐる。日本の前途が暗愁にとざされてゐる様に、日本画壇から二十世紀後半の絵画が生れ出づるとは思はれないのだ。(昭和25年4月)」(同書P180)これらの言葉から従軍を通して詩でなければ表現できないことを獲得した近藤が、詩情的ロマンチズムのみに陥ることなく、リアリズムに根ざした詩情表現を目指したことが考えられる。

その後1964年にヨーロッパへ初の外遊を果たし、この頃から画面は明るくなり、風景画を多数制作するようになるが、1970年ころから再びモンタージュ風の画面構成が表出する。かつての暗い色調と異なり、鳥や草花などが描かれた大作は強固な完成度をもって幻想的な印象を与える作品として表れた。

### 再び戦地へ

作家としての評価が上がってゆくなか、近藤に再び病が襲う。1975年頃から手に痛みを感じ、睡眠薬を服用するようになる。日記をたどると、同年夏頃に「片方の腕が動かなくなる」、11月8日の記述に「片方の手が痛み、指が動かなくなってくる」とある。この先のスクラップブックや日記では、その激痛とともに弱音を吐く近藤の記述が続き、原因が分からず解決が見出せないまま痛みと闘う様子が伝わってくる。近藤はこのような身体で、1976年11月17日にかつての戦地トラック諸島へ再び訪れる。そのきっかけは前述した1975年の、かつての戦友からトラック諸島へ慰霊に訪れた知らせを受け取ったことによるものと思われる。「トラック島遺骨収集促進会陸軍部会」(1975年8月記)の案内と、その後同会がトラック諸島へ訪れた時の写真がスクラップブックに残されていた。また1976年のトラック諸島再訪を前に『上毛新聞』へ寄せたコメントがある。「ことしの11月に、32年ぶりにトラック島に行ってみようと思っています。取材ではなく、英霊に会

いに。』<sup>21)</sup>日記によると、トラック諸島を訪れた近藤は次のように綴っている。「栄養失調になった島に亦行って見たいと云ふのは如何云ふ事であるのか？全く解らない。いいも悪いもない。なつかしいのだと思ふ。誰も居ない島が唯あるだけ。それでいいのだと思ふ。生死の境をさまよった私にハここだけが波乱の土地であるに違ひない。」詩集『白い枯木』にみられるトラック諸島の風景描写は、迫り来る死の予感と、戦場のなかで珊瑚礁や海に沈む夕焼けなど島の美しさを讃えていた。再び訪れたかつての戦地には、爆撃の音もなく、上官の声もなく、唯美的風景が広がっていたはずだった。しかしその美しい風景を再び目にした近藤は、変わらぬ感動を受けるとともに生死の境をさまよった過去と、いままた死を意識して生きる現在に思いを巡らせたのではなかったか。この2年後の1978年に《WAR'S》(fig.3)を制作、翌1979年10月、第33回二紀展に《戦場にて》(fig.4)を出品した。同年11月16日、筋萎縮性側索硬化症にて死去、64歳であった。



fig.3 《WAR'S》1978年



fig.4 《戦場にて》1979年（『二紀展目録』より）

## おわりに

近藤が従軍したトラック諸島の闘いは飢えと併発する病との闘いであり、食物を巡った味方同士の争いであった。「人間から人間の心を奪い、狂人へと駆り立てて」いった様子を、近藤もまざまざと見たに違いない<sup>22)</sup>。今回の調査で近藤が生涯を通して制作した作品のすべてを見ることができなかったが、晩年の《WAR'S》で描かれる覆面と1970年代半ばの明るい画面に描かれた顔の消された人物、《戦場にて》と戦後のモンタージュ風絵画からみえる共通点から、先に紹介した宮本三郎の指摘は近藤の戦後の作品のみならず、生涯を通してその作画に少なからず影を落としていたように思う。

小論は遺稿集『音と灯』および、現存する日記やスクラップブックなどを通して近藤の記述をみてきた。日記やスクラップブックに書かれている事の多くは近藤の絵画論や芸術観、経営していたラ・ボンヌの事、旅先の記録や交友関係などがその時々で綴られており、近藤の多岐にわたる活動を伝えている。小論はその一端を紹介したに過ぎない。一方で近藤の絵画論やラ・ボンヌの活動などは美術家・近藤嘉男研究の本丸と言える。小論が本市の戦後美術史に重要な役割を果たした近藤嘉男の研究にとってさらなる発展の一助となることを期待したい。

## 附記

『音と灯 ―近藤嘉男の遺稿―』、近藤嘉男自筆の日記やスクラップブックからの引用はすべて原文のまま引用した。

近藤嘉男関連資料については旧漢字・旧仮名遣いは新漢字・現代仮名遣いに改めた。

本稿の調査・執筆にあたっては、広瀬川美術館（近藤浩通氏、近藤節氏）、染谷滋氏、春原史寛氏のご高配を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

- (1) 『音と灯』の出版者について、近藤嘉男の先行研究である春原史寛『画家・近藤嘉男による子ども向け絵画教室「ラ・ボンヌ」』では精興社の記述もあるが、図書館の書誌記録では出版者を近藤久江という個人名で記していることから小論では私家版とした。
- (2) 開設年には1947年から1949年まで諸説ある。
- (3) 中野は近藤の近所の同級生で、美術の道に進んでいないが画家になった近藤の展覧会はまめに訪れていた。
- (4) 日置英剛『年表太平洋戦争全史』2005年10月31日、国書刊行会
- (5) 手島仁「描き続けて・住谷磐根」／連載〈手島仁の群馬学講座〉115～125回、『東京新聞群馬版』
- (6) 神谷忠孝「南方徴用作家」『北海道大学人文科学論集』1984年2月24日
- (7) 望月雅彦「女流作家林芙美子、マレー半島に行く」：日本マレーシア学会『日本マレーシア研究会会報 No.44』2009年11月16日
- (8) 松井翠声、武田麟太郎、横山隆一、小野佐世男、郡司次郎正「ジャバ従軍座談会(バタビア放送局より)」『放送』1942年9月号
- (9) 群馬県立近代美術館・高崎市美術館共催「中村節也展」図録1992年4月26日、美術出版デザインセンター／前澤哲也『帝国陸軍高崎連隊の近代史 下巻 昭和編』2011年4月25日、雄山閣
- (10) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書〔27〕 関東軍1（対ソ戦備・ノモンハン事件）』1969年7月28日、朝雲新聞社
- (11) 昭和19年9月30日、御前会議で「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定し、そのなかで絶対国防圏として千島、小笠原、内南洋(中西部)、西部ニューギニア、ティモール、ジャワ、スマトラ、ビルマを含む圏域を定める。トラック島航路をとりマリアナ・カロリン方面に対する船団を「東松船団」、カロリン方面に対する船団を「西松船団」と称した。：日置英剛『年表太平洋戦争全史』2005年10月31日、国書刊行会
- (12) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書〔13〕 中部太平洋陸軍作戦(2) ペリリュー・アンガウル・硫黄島』1968年2月29日、朝雲新聞社：到着日について同書のなかでも24日、25日と2つの記述があり、元となる防衛研究所史料閲覧室所蔵「第31軍部隊行動概要(トラック諸島) 第31軍」から同船に乗船した兵士の記録でも、兵士によって2つの記述に分かれており、恐らく25日未明を指していると思われ、近藤の3月22日の記述によるトラック島まで48時間というのがほぼ間違いないことがわかる。また上陸地とその後の配備については、近藤と同じく会寧から第8派遣隊に編入された富澤久義による『万葉の桜 青春記 北朝鮮会寧-トラック戦線』(1986年6月、私家版)と第73連隊(羅南)より同じく第8派遣隊に編入された阿部庄助『我が青春の記 北朝鮮よりトラック島への旅』(1985年2月、私家版)にも詳しく書かれている。
- (13) NHK「戦争証言アーカイブ」<https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/>
- (14) 伊集院兵団とは伊集院兼信少将を長とする独立混成第51旅団のことで、前述の近藤が編入した中部太平洋方面・第8派遣隊と第2派遣隊の混成旅団：防衛研究所史料閲覧室所蔵『主要部隊長参謀一覧表 昭20.3』大本営陸軍部
- (15) 今回の調査では二次資料としてさまざまな角度から戦史記録にあたり、一行動についても多角的に検証しようと心掛けたが、これまでで示してきたように所属していた隊と上陸地、復員輸送船とその上陸地などはほぼ間違いないといってよい。しかし近藤が『音と灯』のなかで明記している分隊長や隊長、兵長らの名前は最後まで見つけることができなかった。
- (16) 創価学会青年部反戦出版委員会編『戦争を知らない世代へ〔56〕 飢えと炎の島ー長野県出征兵士の記録ー』1979年10月、第三文明社：32人によるトラック諸島の戦争体験ほか座談会が収録されている。
- (17) 前掲書(16)にも詳しいが、本文先述のように昭和19年の2月および4月の大空襲と、その後連日続いた空襲により兵舎の大半が破壊され、食糧庫や衣料も被弾し、あとの補給も続かなかった。元海軍一等兵曹川島正直の回想「トラック島守備隊 中部太平洋に取り残された陸海部隊」(『太平洋戦争ドキュメンタリー 第19巻』1970年、今日の話社)によると、「栄養失調と疫病が蔓延するなかで入院する者も多く、重症患者は海軍が夏島の海軍病院、陸軍は秋島の野戦病院に入院していった。」飢餓によって多くの兵士が死んでいき、食物を争って将校から下士官までが「天皇」の名の下、横暴を働いていた状況は、近藤だけでなく、小論で挙げているトラック諸島へ配属された元兵士の回想すべてで同様に語られている。しかしこのような状況の中、敵軍上陸に備えた3ヶ月分(4ヶ月ともいわれている)の食料は終戦まで手が付けられないまま残り、周知のように、米軍は終戦までトラック諸島へ上陸することはなかった。また第8派遣隊に編入された兵士の回想：前掲(12)をみても、多くが物資不足と飢餓の状況が記され、戦闘状況の記述が少ない点も近藤の手記と一致する。
- (18) 防衛研究所史料閲覧室所蔵「第31軍部隊行動概要(トラック諸島) 第31軍」
- (19) 近藤が手記のなかでたびたび記している苦しみがエピソードにあげた中野の言葉「戦争の悲惨さの実感」であり、トラック島に従軍した兵士の共通した体験ともいえる。前掲書(16)「あとがき」が、それを端的に語っている。「私たちが今回の戦争体験集の編集にあたって痛感したことは、戦争の真っ只中にあって、人間が生きるか死ぬかという時には、どんな平和の論理も道徳も全く役に立たないということだった。食物のことで味方同士が殺し合い、自分さえ助かれば他人は死んでもかまわないという、およそ人間の行為とは思われない残虐なことが平気でおこなわれていった。」
- (20) 宮本三郎「新人を語る：近藤嘉男君」『アトリエ』1949年8月号(271号)
- (21) 〈上毛ギャラリー① 近藤嘉男 迫りくる危機感描く〉『上毛新聞』1976年9月29日
- (22) 前掲書(19)

## 近藤嘉男 年譜（従軍記を中心に、戦後手記（一部抜粋））

| 西暦   | 和暦  | 月   | 日     | 歳  | 近藤嘉男                                     | 出典   | 月  | 日     | 太平洋戦争史／従軍文化人                                                                         |
|------|-----|-----|-------|----|------------------------------------------|------|----|-------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 1915 | T4  | 3   | 22    | 0  | 近藤半造の長男として、前橋市堅町に生まれる。実家は県内有数の砂糖問屋「朝野屋」。 | JC45 |    |       |                                                                                      |
| 1921 | T10 |     |       | 6  | 桃井小学校入学。在学中より油絵を始める                      | KHJ  |    |       |                                                                                      |
| 1927 | S2  |     |       | 12 | 前橋中学校に入学。                                | JC45 |    |       |                                                                                      |
| 1928 | S3  |     |       | 13 | 父の意思で東京に支店を出す為、東洋商業中学に転校。                | KHJ  |    |       |                                                                                      |
| 1930 | S5  |     |       | 15 | 父の病が原因で前橋に戻り、前橋商業高等学校に入学。                | JC45 | 2  | 1     | 白井吉見（作家）、中村節也（画家）、幹部候補生として高崎歩兵第十五連隊に入隊。                                              |
| 1930 | S5  |     |       | 15 |                                          |      | 11 | 30    | 白井吉見（予備役少尉）、中村節也（軍曹）除隊。                                                              |
| 1930 | S5  | この年 |       | 15 | 上毛展入選。                                   | 音と灯  |    |       |                                                                                      |
| 1933 | S7  |     |       | 18 | 《祖母》描く。                                  | KHJ  |    |       |                                                                                      |
| 1934 | S9  | この年 |       | 19 | 父・半造死去（49歳）。家業を継ぐ。                       | JC45 |    |       |                                                                                      |
| 1934 | S9  | この年 |       | 19 | この頃、"馬酔"という俳号で川柳を投稿。                     | SNR  |    |       |                                                                                      |
| 1934 | S9  | この年 |       | 19 | 白日会に入選。この頃、赤城へスケッチに行く。                   | JC45 |    |       |                                                                                      |
| 1935 | S10 |     |       | 20 | 「下仁田」記す。                                 | 音と灯  |    |       |                                                                                      |
| 1936 | S11 |     |       | 21 | 二科展に入選。以後、応召まで出品。                        | JC45 |    |       |                                                                                      |
| 1937 | S12 |     |       | 22 |                                          |      | 7  | 7     | 盧溝橋事件。                                                                               |
| 1937 | S12 |     |       | 22 |                                          |      | 8  |       | 中村節也、動員招集を受ける。                                                                       |
| 1937 | S12 |     |       | 22 |                                          |      | 11 | 28    | 住谷磐根、従軍画家として上海へ出立（12月より6か月の任務）。                                                      |
| 1938 | S13 |     |       | 23 |                                          |      | 2  |       | 中村節也、高崎遠藤部隊千木良隊に召集され、シベリアに国境へ出征。                                                     |
| 1938 | S13 |     |       | 23 |                                          |      | 4  | 1     | 「国家総動員法」成立（法律第五五号）。「本法に於て国家総動員とは戦時（戦争に準ずべき事変の場合を含む以下之ニ同ジ）」                           |
| 1938 | S13 |     |       | 23 |                                          |      | 7  | 9     | 張鼓峰事件勃発…歩・第73、75、76連隊、山砲兵隊25連隊らが応戦）。                                                 |
| 1939 | S14 | 秋   |       | 24 | 「川場村」記す。                                 | 音と灯  |    |       |                                                                                      |
| 1940 | S15 |     |       | 25 |                                          |      | 11 |       | 中村節也、召集解除され満州国より帰還。                                                                  |
| 1941 | S16 | 8   |       | 26 | この年、夏に応召（月不詳）。会寧に従軍（歩兵第十九師団第75連隊）。       | 音と灯  |    |       |                                                                                      |
| 1941 | S16 | 12  |       | 26 |                                          |      | 12 | 8     | 真珠湾攻撃。                                                                               |
| 1942 | S17 | 3   |       | 27 |                                          |      | 3  | 3     | 郡司次郎正ら陸軍報道班含む第13連隊、バンナムにて敵前上陸。                                                       |
| 1942 | S17 | 3   |       | 27 |                                          |      | 3  |       | 住谷磐根、従軍画家として南洋諸島へ（3月から8か月間の任務）。                                                      |
| 1943 | S18 | 8   | 13    | 28 | 《會寧の頃》描く。                                | 音と灯  |    |       |                                                                                      |
| 1943 | S18 | 9   |       | 28 |                                          |      | 9  | 30    | 「今後取るべき戦争指導の大綱」決定。絶対防衛権を千島、小笠原、内南洋（中西部）、西部ニューギニア、スンダ（ティモール、ジャワ、スマトラなど）、ブルマを含む圏域と定める。 |
| 1944 | S19 | 2   | 17-18 | 29 |                                          |      | 2  | 17-18 | 南洋群島に、米機動部隊（艦載機200機）が大挙来襲。被害甚大。                                                      |
| 1944 | S19 | 2   | 25    | 29 | （第8派遣隊編成。）                               |      | 2  | 25    | 22日の派遣隊編成の下令を受け、第8派遣隊、新京、羅南、会寧、羅津等各駐屯地で編成。                                           |
| 1944 | S19 | 2   |       | 29 | （会寧を出発。）                                 |      | 2  | 28    | 歩兵第75連隊、会寧出発。                                                                        |
| 1944 | S19 | 3   | 3     | 29 | （陸軍船対馬丸により釜山出帆。）                         |      | 3  | 3     | 6時、中部太平洋方面・第8派遣隊基幹、陸軍船対馬丸により釜山出帆。                                                    |

| 西暦   | 和暦  | 月  | 日       | 歳  | 近藤嘉男                            | 出典  | 月  | 日     | 太平洋戦争史／従軍文化人                                                               |
|------|-----|----|---------|----|---------------------------------|-----|----|-------|----------------------------------------------------------------------------|
| 1944 | S19 | 3  | 12      | 29 | (東京湾に寄港し、「東松2号船団」に編入され同湾を発進した。) |     | 3  | 12    | 対馬丸、東京湾に寄港し、「東松2号船団」(中部太平洋方面派遣隊)に編入。東京湾・木更津沖を出帆。護衛隊機艦「龍田」等一部の船舶が被害沈没。      |
| 1944 | S19 | 3  | 16      | 29 | 「輸送船日誌 三月一六日」記す。                | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 3  | 19      | 29 | 「輸送船日誌 三月十九日」記す。                | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 3  | 19      | 29 | 「舟」記す。                          | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 3  | 21      | 29 | 「輸送船日誌 三月二十一日」記す。               | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 3  | 22      | 29 | 「輸送船日誌 三月二十二日」記す。               | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 3  | 24      | 29 |                                 |     | 3  | 24    | 中部太平洋方面・第8派遣隊基幹、トラック島(楓島を含む七曜諸島)到着。                                        |
| 1944 | S19 | 3  | 25      | 29 | (トラック島到着。)                      |     | 3  | 25    | 中部太平洋方面・第8派遣隊基幹、トラック島(楓島を含む七曜諸島)到着。                                        |
| 1944 | S19 | 3  |         | 29 |                                 |     | 3  | 29-31 | 米軍機、四季諸島爆撃。第22航空戦隊、70機以上の損耗。                                               |
| 1944 | S19 | 4  |         | 29 |                                 |     | 4  | 1     | 米機動部隊トラック、メレヨン空襲。                                                          |
| 1944 | S19 | 4  | 22      | 29 | 「カナカの娘」記す。                      | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 4  | 30      | 29 | 「靖国神社祭りの日の空襲」記す。                | 音と灯 | 4  | 30    | 夏島付近で米軍機と空中戦開始。四季島、月曜島、環礁の空で空中戦。米機動部隊が一日にかけて延べ2,200機でトラックに来襲。第22航空戦隊壊滅状態に。 |
| 1944 | S19 |    |         | 29 |                                 |     | 7  | 18    | 18時、大本営、サイパン島守備隊の玉砕を発表。東条英機内閣総辞職。                                          |
| 1944 | S19 | 8  | 1       | 29 | 「心」記す。                          | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 8  | 13      | 29 | 「平野の場合」記す。                      | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 9  | 24      | 29 | 「朝心」記す。                         | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1944 | S19 | 9  | 27      | 29 | 「無題」記す。                         | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 2  | 23      | 30 | 「夜明け前」(ワイレス、昭和二〇・二・二三)記す。       | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 3  | 14      | 30 | 「森」記す。                          | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 3  | 30      | 30 | 「湯のない温泉(いでゆ)」記す。                | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 4  | 10      | 30 | 「随想」記す。                         | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 4  | 11      | 30 | 「夢」記す。                          | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 4  | 12      | 30 | 「客観視」、「棒心雑記」記す。                 | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 |    |         | 30 | (年月日不明)「新たな進発に当りて(或る日の手記より)」    | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 | 4  | 22      | 30 | 「埃に新たなること(退院して)」記す。             | 音と灯 |    |       |                                                                            |
| 1945 | S20 |    |         | 30 |                                 |     | 8  | 5     | 前橋、高崎大空襲。前橋5日の晩、死者535名、被害家屋1万1518戸。                                        |
| 1945 | S20 |    |         | 30 |                                 |     | 8  | 14    | ポツダム宣言受諾。日本、無条件降伏。                                                         |
| 1945 | S20 |    |         | 30 |                                 |     | 8  | 14-15 | 伊勢崎、高崎空襲。高崎市死者6人、被害家屋701戸(8.14-15)。                                        |
| 1945 | S20 |    |         | 30 |                                 |     | 8  | 15    | 天皇、終戦詔勅放送。                                                                 |
| 1945 | S20 |    |         | 30 |                                 |     | 9  | 10    | 海軍病院戦「高砂丸」、復員船第一                                                           |
| 1945 | S20 |    |         | 30 |                                 |     | 9  | 20    | トラック諸島、米軍上陸、日本軍武装解除。                                                       |
| 1945 | S20 | 10 | 20      | 30 | 「音と灯」記す。                        | 音と灯 | 10 | 11    | 米軍200人、高崎の旧東部38部隊に進駐。                                                      |
| 1945 | S20 | 12 | 11<br>夜 | 30 | デッサン《故郷近き夜(病院船にて)》を描く。          | 音と灯 |    |       |                                                                            |

| 西暦   | 和暦  | 月   | 日          | 歳  | 近藤嘉男                                                                                           | 出典           | 月 | 日  | 太平洋戦争史／従軍文化人                  |
|------|-----|-----|------------|----|------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|---|----|-------------------------------|
| 1946 | S21 | 1   |            | 31 | (トラック島出帆。)                                                                                     |              | 1 | 5  | 第75連隊、帰還のためトラック島出帆 (LST502号)。 |
| 1946 | S21 |     |            | 31 | (浦賀上陸。)                                                                                        |              | 1 | 15 | 浦賀上陸。                         |
| 1946 | S21 | 1   | 23<br>朝    | 31 | 「冬枯」(国立富士病院、昭和二一・一・二三、朝) 記す。                                                                   | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 2   | 3          | 31 | 「御苦労様会 (或る日の手紙より)」 記す。                                                                         | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 2   | 6          | 31 | 「裾野」 記す。                                                                                       | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 2   | 15         | 31 | スケッチ《いもと小刀》描く。                                                                                 | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 2   | 27         | 31 | 「東京」 記す。                                                                                       | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 1          | 31 | 「夜の壁」、「いなご」 記す。                                                                                | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 2          | 31 | 「黒いマスク」、「地階」 記す。                                                                               | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 3          | 31 | 「桃の節句」、「雪の夜の風」、「桃色の画鋏」 記す。                                                                     | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 4          | 31 | 「友情」 記す。                                                                                       | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 5          | 31 | 「枯園」、「熱」、「恢復期」 記す。                                                                             | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 6<br>ひる    | 31 | 「自序」 記す。この頃、復員。                                                                                | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 6          | 31 | 「辞書」、「少女」、「春の一日」、「ひとで」 記す。                                                                     | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 7          | 31 | 「人力車」、「春 (未完)」 記す。                                                                             | 音と灯          |   |    |                               |
| 1946 | S21 | 3   | 18         | 31 | 「生と死」 記す。                                                                                      | 音と灯          |   |    |                               |
| 1947 | S22 |     |            | 32 |                                                                                                |              |   |    | 「二紀会」 発足。                     |
| 1947 | S22 |     |            | 32 | 二紀会春季展に出品。春季展賞受賞。                                                                              |              |   |    |                               |
| 1948 | S23 | 7   | 9          | 33 | 「失敗した絵によせて」(百号を『林或は銀河の町』と題す)                                                                   | 音と灯          |   |    |                               |
| 1948 | S23 | 7   | 26-<br>31  | 33 | 二紀会新人展 (7/24東京新聞では「第二紀会油絵試作展」、銀座・松坂屋) に出品、春季展賞受賞。二紀会招待となる。                                     | KZH          |   |    |                               |
| 1948 | S23 | 10  | 3-<br>17   | 33 | 第2回二紀展 (東京都美術館) に《壊された風景》、《縮図》、《作品 (A)》、《作品 (B)》を出品。島岡實と共に二紀会賞を受賞し、二人とも二紀会同人となる。(この年の同人推挙は19名) | KZH/<br>二紀目録 |   |    |                               |
| 1949 | S23 | 5   |            | 33 | 「近代絵画研究所」及び絵画教室「ラ・ボンヌ」を開設 (開設年には1947～49年まで諸説ある)。                                               | 上毛N          |   |    |                               |
| 1949 | S24 | 7   | 8          | 34 | 「模写する夜」 記す。                                                                                    | 音と灯          |   |    |                               |
| 1950 | S25 | 4   | 23         | 35 | 「折にふれ」 記す。                                                                                     | 音と灯          |   |    |                               |
| 1964 | S39 | 4   | 18         | 49 | 第1回外遊、6ヶ月で9カ国を回る。正午、羽田発 (KL864機) - マニラ・バンコク経由、カルカッタ (現地・午後8時半) - カイロ (19日明け方5時頃着)。             | 手帖2          |   |    |                               |
| 1965 | S40 | 6   | 1-6        | 50 | 近藤嘉男滞欧洋画展 (前三百貨店)                                                                              | DM           |   |    |                               |
| 1965 | S40 | 9   | 26-<br>28  | 50 | 近藤嘉男の滞欧作品 沼田展 (山田屋画廊・沼田市)                                                                      | DM           |   |    |                               |
| 1968 | S43 | 2   | 21-<br>3/2 | 53 | 渡欧。ロンドン、パリ、アムステルダム、ミラノ                                                                         | 手帖3          |   |    |                               |
| 1975 | S50 | この頃 |            | 60 | 嘉男、入院する。                                                                                       | 75Serp       |   |    |                               |
| 1975 | S50 | 7   | 14         | 60 | 宮本さんの死去の跡二紀会総会が流れ、委員会、理事会が交互に開かれ～之から逃げる旅行だ。                                                    | 75Serp       |   |    |                               |
| 1975 | S50 | 7   | 27-<br>8/4 | 60 | ギリシャ・エーゲ海外遊。                                                                                   | 手帖6          |   |    |                               |
| 1975 | S50 | 8   | 8          | 60 | ギリシャより帰って…手痛く、疲れはなはだし。…。睡眠薬との斗ひは全然進展して居ない事を知らされる。/右手の痛みと俱にあのすごかった過去の●照が影を落としてゐる。               | 75Serp       |   |    |                               |

| 西暦   | 和暦  | 月  | 日     | 歳  | 近藤嘉男                                                       | 出典               | 月 | 日 | 太平洋戦争史／従軍文化人 |
|------|-----|----|-------|----|------------------------------------------------------------|------------------|---|---|--------------|
| 1975 | S50 | 8  | 15    | 60 | 戦後30年、トラック島遺骨収集事業をこの年の9月実施を最後とする知らせ（トラック島遺骨収集促進会陸軍本部）を受ける。 | 75Scrp           |   |   |              |
| 1975 | S50 | 8  | 20    | 60 | 身体が悪い。睡眠薬の具合もよくない。…。                                       | 75Scrp           |   |   |              |
| 1975 | S50 | 8  |       | 60 | 片方の手が動かなくなる。・・                                             | 75Scrp<br>(8-11) |   |   |              |
| 1976 | S51 | 11 | 17    | 61 | トラック島再訪。                                                   | 手帖7              |   |   |              |
| 1978 | S53 | 3  | 14    | 63 | 二紀会評議員の拝命を受ける。                                             | 78クロッキー帳         |   |   |              |
| 1978 | S53 | 10 | 14    | 63 | 第32回二紀展（東京都美術館）に《WAR（戦争）》出品。                               | 二紀目録             |   |   |              |
| 1979 | S54 | 10 |       | 64 | 第33回二紀展（東京都美術館）に《戦場にて》出品。                                  | 二紀目録             |   |   |              |
| 1979 | S54 | 11 | 16    | 64 | 5時、近藤嘉男が筋萎縮性側索硬化症で死去（64歳）。                                 | KZH              |   |   |              |
| 1979 | S54 |    | 18    |    | 橋林寺にて葬儀が行われる。戒名、厳峻院嘉山真道居士。                                 | 音と灯              |   |   |              |
| 1979 | S54 | 12 | 15-18 |    | 近藤嘉男遺作展（群馬厚生年金会館）。                                         | アルバム             |   |   |              |
| 1981 | S56 | 11 | 16    |    | 『音と灯－近藤嘉男遺稿－』発行。                                           | 音と灯              |   |   |              |
| 1997 | H9  | 4  | 1     |    | 近藤嘉男のアトリエを改修した広瀬川美術館が開館。                                   | KZH              |   |   |              |

#### 出典元略称

- \* JC45：『上州文化』（第45号）、（財）群馬県教育文化事業団発行、1991年1月25日
- \* KHJ：『近藤嘉男画集』、上毛新聞社、1989年11月16日
- \* SNR：『川柳けやき』八月號（15巻8号）、1934年8月
- \* KZH：『アーツ前橋開館記念展 カゼイロノハナ 未来への対話』、美術出版社、2013年
- \* 上毛N：『上毛新聞』、1976年9月29日、〈上毛ギャラリー① 近藤嘉男 迫りくる危機感描く〉
- \* DM/手帖/Scrp：広瀬川美術館所蔵資料（近藤嘉男手記ほか）

※ 手帖から抜粋した記述は、原文のまま掲載した。判読不明の文字については●で記した。

## 「表現の森」の始まりと2年目の活動を通じて考えたこと

今 井 朋

### (1) はじめに

昨年末の朝日新聞1面では「平成とは」という特集が組まれた。天皇が退位の意志を表明し、「平成」という時代の終わりが見えてきた今、この時代を象徴する課題を記者は選び取ろうとしていたはずだ。記事の最初に、「平成とは、家族の姿が静かに、だが劇的に変わった時代だった。」<sup>(1)</sup>と書きしるしながら、ひきこもりの若者であった人々が年齢を重ね、その保護者である親世代が高齢化する現象を呼んだ「8050危機」<sup>(2)</sup>という問題を紹介している。「ひきこもり」の問題が、若者だけにとどまらないのは、日本全国どの自治体にも共通する。メディアの役割は、こうした潜在的に社会が抱えている問題を明文化し、光を当てることで、浮き彫りにしてくれる点にある。アーツ前橋が2016年から取り組んでいる「表現の森」のプロジェクトには、このようなメディアが持つ役割を担いつつ、マスメディアとは異なるアートという視点から社会課題に光を当てることに、活動の意義を見出すことができるのではないか。

ここで、引き合いに出した「ひきこもり」の問題は、社会の様々な課題を列挙すれば、そのほんの一例に過ぎない。現代社会には、異なる形の「生きづらさ」が存在する。多くは社会の構造的な問題に由来しているが、個人主義が台頭する現代では、時に弱者自身が批判の対象になることもある。表現の森は、こうした社会課題にアートがどのような役割を持ち得るのかを考えるためにアーツ前橋が始めたプロジェクトだ。私たちが生きているこの社会はどんな社会なのか、と考えるところから始め、プロジェクトの在り方や、目的、相手、方向性を考えて行く。大きな特徴として、私たちのプロジェクトを中心に動かしているのは、あくまでアーティストだ。彼らの観察眼、批評性、実行力、対話力を通じて、私たちはプロジェクトを進めている。

表現の森の活動を始めてから早2年（2016年度開始）が経過し、2018年度からは3年目に突入する。1年目の企画展を核とした活動から、2年目のプロセス重視の活動にシフトする中で、もう一度なぜ、

どのようにしてこれらの活動が始まったのかという足元の事実を確認し、美術館のアウトリーチプログラムとしての活動の中で見えてきた関係性の変化やそこから生まれる意味を一旦、言語化することを本論文では目指す。

### (2) 「表現の森」を立ち上げる

「表現の森」はあくまでアーティストが主軸となり行うプロジェクトをベースにしている。プロジェクト立ち上げまでの経緯を、ここに簡単に記しておきたい。詳細は、『REAR38号』にも書いているので、こちらも含めて参照いただき、ここでは上記論考では書ききれなかったことや論考発表以降の状況の変化などを中心に書き進めたいと思う<sup>(3)</sup>。

2013年10月にアーツ前橋が開館を迎え、開館記念展と同時期の秋の企画展は、「衣・食・住」をテーマにした展覧会が既に予定されていた。また、春には個展を開催するのが定例となっていくのに対して、夏の会期の企画展はまだ流動的であった。夏休みをはさむ期間なので、子どもたちの来館を促すようなテーマを設けることもあれば、大枠が固定している他の会期と異なり、美術館の学芸員が個人的に関心の高いテーマを発展させられるような実験的な試みも可能な緩やかな設計がされている。こうした、夏会期の企画展の一本として、「エイブル・アート」についての企画展をやってみるのはどうか。という話が企画担当学芸員の間で持ち上がったのはアーツ前橋のちょうど開館前後だったと記憶している。

2013年の時点では、現在ほど障害者の芸術に関心を示している美術館は多くなかった。日本財団が、「アール・ブリュット ジャポネ展」と題して、フランス・パリ市立アル・サン・ピエール美術館での展覧会を企画したのが2010年から2011年で、その凱旋帰国展が国内の美術館で行われ、障害者の創作が「アール・ブリュット」という和製フランス語で国内の美術関係者に伝播し始める頃でもあった。日本の和製アール・ブリュットは、知的障害者の芸術振興に対して美術の専門用語を単に使用していると

いう印象が拭えず、この違和感が、表現の森の活動を作品展示のみに注視した企画展ではなく、プロジェクトをベースとしたプロセスを重視する枠組みも取り込むことで教育普及や地域アートプロジェクトのノウハウも蓄積できるのではと考えた。「アール・ブリュット」という言葉の使用に関しては、2017年9月9日に開催された、「障害者の芸術支援フォーラム」の冒頭で日本財団公益事業部国内事業開発チームリーダーの竹村利道氏は、「美術業界からは『アール・ブリュットの原義を間違えて伝えたのは、日本財団なのでは？その責任をどう考えているのか？』、福祉業界からは『アール・ブリュットばかり支援していて、障害者のアート活動はそう呼ばれなければならない空気をつくったのでは？その空気感が息苦しい』など」<sup>(4)</sup>と日本財団のここ数年の活動を振り返りつつ発言しているように、近年の和製アール・ブリュットの動きも昨年頃から状況は変わりつつあるように感じる。いずれにしても、美術と福祉の分野をまたぐが故の複雑さはこの種の活動とは切り離せない問題だろう。つまり、美術であれば作品というコンテキストのみを扱えばいいかといえ、そうではなく、福祉や医療に関わる分野であるからこそ、現場のコンテキストを時に優先させつつアートが意味を持つコンテキストを作っていく必要があるということだ。

アーツ前橋が開館する以前から、前橋には「NPO法人前橋芸術週間」が街中を中心に地域アートプロジェクトに近い活動を行っていた。エイブル・アートも彼らの活動テーマの一つであり、1999年には前橋市役所で「エイブル・アート展」を開催している。このNPOでのボランティア活動がきっかけとなり奈良県に拠点を置く「たんぼぼの家」に就職をされた岡部太郎氏は、現在では「一般財団法人たんぼぼの家」の常務理事として活躍している。一方、隣の高崎市では、前島芳隆氏を中心となって「NPO法人工房あかね」が障害者のアート活動を支援するなど、アーツ前橋開館前から群馬県内にはいくつか注目すべき障害者に関わる活動があった。こうした、前橋を中心とした近隣県（主には栃木）も含めた障害者の表現活動の調査は、表現の森の準備段階から現在まで積極的に行っている。前橋芸術週間は、この分野の活動は現在ではほとんどなく、県内の活動は主に前島芳隆氏が障害者施設に出向き、創作教室を定期的で開催している程度となった<sup>(5)</sup>。

ただ、2000年から社会福祉法人として活動している「すてっぷ」は、美術の分野だけではなく、陶芸から書までさまざまな芸術活動を取り入れる市内では新しいタイプの施設で、施設長の鈴木隆子氏は、「たんぼぼの家」も参考にしているとおっしゃっている。こうした地域の現状を調査する中で、福祉の分野は福祉の分野として文化／アート活動を取り入れようとしているが、ならば私たちは文化の専門家である美術館としてどのような活動を考えられるかが大きなテーマとなっていた。

### (3) アウトリーチの目的をどこに置くべきか

プロジェクト型のアートというのは、実際のプロジェクトを始める以前のリサーチがその後の展開を大きく左右する。本プロジェクトを立ち上げる際に、最も多くの時間をかけたのは、アーティストの関心とマッチングしながら、協働してくれる前橋市内の施設やコミュニティを探し出すことだった。このプロセスは学芸員としてのリサーチ能力が問われるし、今後の長期プログラムを併走していただくことを考えると、アーティストとの相性を含め、とても慎重に関係各所へのヒアリングとリサーチを重ねていった。従来の美術館の教育普及プログラムは、自分たちが提供可能なプログラムを複数準備し、そのプログラムへの参加を希望する団体や個人を募るのが一般的だろう。特に首都圏のような文化芸術への意識の高い人々が多い地域にある公立の施設がプログラムへの参加者を公募すれば、たとえプログラムが有料でもある程度の希望者は集まるだろう。それは、公立施設の公平性にも合致する。表現の森が、そうした従来の教育普及のプロセスを踏まなかったのは、もちろん理由がある。私たちがアプローチしたかったのは、美術館が提案すればプログラムに参加してくれるような美術にある程度の関心をしめす層ではなかった。

美術館のアウトリーチ活動は、決して最近の新しい傾向ではなく1980年代の美術館ラッシュの中で建てられた美術館の中でも、いわき市美術館のように自館の美術専用車まで持って作品を遠方の市内の学校に運び一時的なコレクション展を開くような先駆的なアウトリーチプログラムを組んでいる美術館もある。ただ、これらのアウトリーチ活動は、確実に美術館へのインリーチを見込んでの活動だったのではないだろうか。美術の裾野、特に年齢層の低い

子どもたちを対象にアウトリーチのプログラムを組むことで未来の来館者を育てることを大きな目的にしている。確かに、アウトリーチをするからにはインリーチに繋げたいが、表現の森の対象者は美術館に足を運ぶことすら難しい人たちも多い。今回のプロジェクトの対象者を少し乱暴だが、一言でまとめるとすると「美術館へのアクセスが基本的に難しい人々」となる。またプロジェクトの大きなテーマとして「現代社会における生きづらさ」について考え、もしそこに福祉や医療の社会課題があるならば、そのことに対してアーティストや美術館はどのような役割を持ち得るのかということを考えようとした。

現在行っているプロジェクトの中で、神楽太鼓奏者の石坂玄士氏とダンサーの山賀ざくろ氏は市内の特別養護老人ホーム（以下、特養）に通っている。2016年4月のプロジェクト開始時には、同法人のデイサービスに通っていたのだが、2016年11月からは特養に活動の場を変え、現在も引き続き通っている。デイサービスと特養の大きな違いは、入所施設かそうでないかだ。デイサービスの利用者の生活の場所はいくまで自宅であり、施設へは入浴やレクリエーションなどの活動を目的にやってくる。それに対し、特養の利用者にとって施設は自らの生活の全てだ。私たちが活動の場を特養に変えた理由には、この事実が大きく影響した。アートの活動は余暇活動と見なされることも事実であるが、私たちの活動が単に施設のレクリエーションのようなプラスαの活動として認識されるのではなく、高齢者の生活にもっと寄り添う形で活動を行えないかと考えた。特養の高齢者たちは、朝から晩までその場所で生活を営んでいる。認知症をお持ちの方が多く、会話の通じる方もいるが、言葉での会話が困難な方が大多数



fig.1 特別養護老人ホームで活動中の石坂玄士氏

だ。80名近くの利用者の中で、私たちが活動する際には、特に参加者を限定することはせず、使用させていただく大広間にその時間に居合わせた方は全員活動に巻き込まれることになる (fig.1)。言葉でのやり取りは難しいが、楽器の音の振動を利用したコミュニケーションであれば、可能な方は多い。コミュニケーションとまではいわないまでも、私たちや時には施設のスタッフさえも驚くような表情やしぐさの僅かな反応を示される方もいる。

特養というのは、多くの死を受け入れる場所でもある。ここにいらっしゃる高齢者の多くは、外出することもほとんどなく、日常的に訪問する家族や施設のスタッフ以外の人々に面会する機会もそう多くないようだ。彼らは、この施設の中で生活の多くの時間を過ごし、近い未来に訪れるであろう死を穏やかに待っているようにも見える。活動の記録の中で、石坂氏が以下のようなことを書いている。

音の在り方は、やはり、この世とあの世をつなぐ媒介的な役割もあるし、その音を操る者は、死へと向かう方々のある意味ナビゲーターでもあるのかもしれないという想いに至ったのだ。(中略) 答えの出る問題ではないが、誰もがいずれ訪れる死というものを、どのような心持ちで迎えることができるのか？ということになってくるのかもしれない。答えの出ないというところにおいて、こういった場所にアートが介入する意味は、あるのかもしれない<sup>6)</sup>。

特養は、美術館としてアウトリーチをしても直接的にはインリーチにはつながらない場所である。参加する高齢者にとって、私たちの活動は、死を迎える前に気持ちの良い音に出会えることでしかないかもしれない。認知症のある高齢者にとって、ワークショップにおける経験の積み重ねという感覚は存在しないので、特に楽器が上手くなるわけでもない。多くの高齢者は、記憶さえ積み重ねることができないので、毎回のワークショップはほぼゼロベースから始まる。それでは、何のために活動を行うのかという問いを、次章に繋げたいと思う。

#### (4) プロジェクトを核に広がる関係性

特養での活動を考えた時、これらの活動は単に参加者とアーティストの関係性だけで成り立つ活動ではないことを強く考えさせられる。私たちはアーティストともに「ケア」の現場を共有させていただいている。美術とは直接的に関係のなさそうな現場に居合わせる時、学芸員やアーティストが主導です

べてを決めていかないということは、基本的なスタンスになる。そうした意味で、プロジェクトの中にさまざまなレイヤーが生まれる。例えば、特養の活動を例に挙げれば、施設と私たちをつなぐコーディネーター、記録者、施設長、施設のスタッフ、利用者、利用者の家族ということになる。この関係性のレイヤーから生まれる複数の視点は、こうしたアートプロジェクトの醍醐味とも言える。すべての人々がこのプロジェクトに対して自分なりの距離感を保ちつつも、当事者になれることもある。プロジェクトへの当事者意識をどのレイヤーの人まで持ってもらえるようにプログラムを組むのかは、アーティストとともに私たちが考えていくべきことだ。

また、表現の森には、群馬大学（以下、群大）教育学部美術教育の茂木一司教授とその教え子が中心になり2016年に立ち上げたNPO法人まえばしプロジェクトも積極的に関わっている。例えば特養のプロジェクトのコーディネーターをしてくださる木村祐子氏は、特養の所属する社会福祉法人の職員であると同時にこのNPOの代表でもある。アートによるソーシャルインクルージョンの必要性が美術関係者の間でも重要なトピックとして昨今は挙がるが、美術教育の分野で茂木教授は早くからそうした取り組みをされてきた。こうした茂木教授の長年の種まきと同じ地域にある美術館としての私たちの社会への関心がクロスしたところにこの表現の森のプロジェクトは存在している。

美術館がNPOと協働することのメリットは、主に二つ挙げられる。まず一つ目は、人材育成である。NPOまえばしプロジェクトは、群馬大学を母体に形成された団体であるため、基本的には群馬大学教育学部の卒業生または在校生で構成される。美術館と大学が連携することで、地域アートプロジェクトを運営できる人材を育てるプログラムは千葉大学を始め、その他にも全国で幾つか先行する事例はある。また、文化庁が大学と美術館が協働する形で、人材育成を目指すプログラム構築のための助成金を設けていることも、こうした大学と美術館が連携する流れを支えているとも言える。

実際に、表現の森のプロジェクトのうち、前橋出身・在住のアーティストの中島佑太氏が南橋団地で行うプロジェクト（fig.2）においては、大学生たちがワークショップの補助だけでなく、彼ら自身でワークショップのプログラムを構成し、記録まで行

うこともある<sup>(7)</sup>。学部生の多くが、美術の教員になることを目指す中で、そうではない選択肢、例えば、美術館の教育普及や地域アートプロジェクトの可能性、またはそれを運営するNPOの重要性などを感じてもらえたのではないだろうか。また、アーティストと共にプログラムを設計することで、学校教育の美術と現場の美術の違いを感じ、今後教員になる学生たちにとっても良い刺激になるだろう。

二つ目に、美術館の事業を外部の団体と共有し、連携することで、アートによる人的広がりを獲得することができる。表現の森の活動を始める頃に、美術館連絡協議会の海外研修プログラムに派遣していただいたことがある<sup>(8)</sup>。フランスを中心とした美術館の福祉施設などへのアウトリーチ活動をリサーチして感じたのは、美術館の中に企画展を作る学芸部署とほぼ同じ規模でプロジェクトに特化した部署が設けられていることだった。日本の美術館のコンテクストとはまったく異なるので、活動内容自体は参考になっても、実際にこうした活動を行うのは人材不足により難しいとは思った。ただ、日本の美術館の良いところは、美術館の外にそうした人的広がりを持てる可能性が十分にあるということだ。もちろん、ヨーロッパの幾つかの美術館のようにプロジェクトを通じて安定した雇用を生み出すことは難しいが、美術館外のスタッフが美術館のプロジェクトに関わることの意義は大きい。また、アーツ前橋のような地方の中規模館は、学芸員の数が決して多くはないため、美術館運営に必須の展覧会事業に多くの人員が割かれ、教育普及事業や地域アートプロジェクトのための人員は必要最小限となる。こうした場合、美術館のスタッフではない形で、どれだけ美術館外の人たちを自分事としてプロジェクトチームに引き入れられるかが、重要になる。

表現の森は、5つのプロジェクト（fig.3、4）で



fig.2 南橋団地で活動する中島佑太氏



fig.3 母子生活支援施設のぞみの家でのワークショップの様子

構成されるが、アーティストを中心にした、プロジェクトチームを作り、その繋がりを大切にしている。



fig.4 Port Bが協働した社会福祉法人フランシスコの町あかつきの村内のお御堂

実際に参加者を対象にしたワークショップも大切だが、それ以上にこうしたプロジェクト内のチームビルディングに多くの時間を費やすことは、今後この表現の森の活動や考え方自体が地域の中で浸透し、根付いていく中でとても大切なことになるだろう。

う。また、こうした地域の人材との連携は、教育普及担当不在の小さな美術館でも、いかに外部と協力することでダイナミックな動きを作れるのかの一つの参考になればと思う。

##### (5) プロジェクトの記録

従来の美術館の教育普及が不特定多数を対象としたプログラムを組むことで美術館の受容者層を拡大しようとするのに対し、表現の森の活動は、ある特定の同じコミュニティに時間をかけてアプローチし、ごく少数の対象者の深い体験を目的にしている点で、美術館で一般に行われるプログラムとは異なる。一定時間同じ対象に関わることによって、コミュニティの変化そのものを促すこともあるし、そのコ

ミュニティに関わる一定層にとってアーツ前橋は必要不可欠な存在になることもある。限られたコミュニティにしか関わらないスタンスは、ともすると公立施設としての美術館の性格と相反するものを感じられるかもしれない。これまでのプロジェクト資金の一部は、助成金によっても賄われてはいるが、大部分はあくまで税金である。その税金を限られた一部の人たちに対してのみ行うのは、間違っていると考える市民や行政関係者もいるかもしれない。この「公」という問題を打開するには、プロジェクトの記録が、一つの説明にもなりうるのではないかな。

表現の森の企画展を開催した際、活動の記録として紙媒体の記録集をつくるという案もあったが、最終的にインターネット上に特設サイトを設け、継続事業の記録を蓄積していくことになった。現在も、活動が行われるごとに記録が更新されている(<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>)。この記録には、大きく三つの目的がある。

まず一つ目は、誰が記録者となるのかという問題とも関係するが、プロジェクトによっては、前章で述べたようにアーティストを中心にしながら異なる立場の人々がプロジェクトを構成している。アーティストとコーディネーターを中心に記録が積み上げられるが、それ以外のプロジェクトに関わる人々の言葉もビデオによるヒアリング記録やインタビューを基にした編集記録などを利用し、できる限り彼らの考えや感じていることを言葉にして拾いあげるようにしている。プロジェクトを取り巻く異なる視点を言葉にすることで、私たちの活動そのものを私たちのコントロール下から解放する意味がある。人と人が接する活動である限り、そこには私たちの想定しない出来事もあるし、反応もある。ただ、プロジェクトの記録者にはプロジェクトの当事者としての意識を持って欲しいと考えている。表現の森は、確かにアーツ前橋の活動として始まってはいるが、プロジェクトに関わる全ての人がプロジェクトの当事者である。少なくとも記録を担う関係者には、自分ごととしてのプロジェクトの課題意識を持ってもらうためにも活動を通じて考えたことをどんな言葉でも良いので、言語化してもらっている。

二つ目の目的は、限られたコミュニティ内で行なわれるという前章で挙げた課題の克服である。ひきこもりの経験のある若者たち、DV等諸事情で母子生活支援施設で暮らす母子、特養に暮らす高齢者な

どこのプロジェクトの参加者の多くは、さまざまな事情で写真撮影も困難な状況にある。活動を写真や動画で伝えることは肖像権の問題からとても難しい。できる限り私たちがどのような目的を持って、実際にどの程度の頻度で、どのような活動をしているのかということを知ってもらえるよう限られたイメージと文字をネット上に蓄積することでより多くの人に情報を開示している。

三つ目の目的は、私たちの活動を具体的な事例として留めず、活動を言語化し評価（否定的、肯定的両者の意味で）に繋げることで、今後このような活動を進めようとする美術館や施設への参考になるようなロジックモデルを構築する<sup>(9)</sup>(fig.5)。全国でさまざまな福祉・医療とアートをつなげる活動が進む



fig.5 2016年8月28日と29日に企画展関連イベントとして開催したシンポジウムの様子

中で、アーツ前橋の活動は東京などの大都会とは異なる地方都市の普段から芸術活動を行っているわけではない施設で活動をしていることに大きな特徴がある。そもそも芸術への関心や意識の高い人々が運営している施設でプログラムを行うのではなく、単に

アーツ前橋の近隣にあるという理由で協働している施設である。保守的な気候の残る群馬という場所で新しい活動を始めることは、きっと首都圏や大都市のような既にさまざまな活動の選択肢のある場所の事例とも異なるのではないか。逆に極端に自然豊かな田舎であれば、昨今の流行とも言える芸術祭という形でアートが逆に身近になっている。都市でも田舎でもない、この郊外的な街こそ、こうした活動を必要としているはずだ。

#### (6) 美術館はどこまでやるか ゆるやかさの設計

本論考では、美術館のアウトリーチということは何度も書いているが、私たちは美術館の活動の一環

として表現の森を行っている。美術館が主体的にこうした活動を行う意義については、活動と並行して常に考えていかなければならない。現段階での考えをここに記しておく。

継続事業の中でも、美術館を利用した例としてもっとも顕著な活動は滝沢達史氏とアリスの広場のプロジェクトだ。アリスの広場は、前橋市内に数少ないひきこもりや不登校の経験のある若者が通えるフリースペースだ。活動を開始した2016年は、アーツ前橋から車で20分程度のところに位置していたが、市外からの利用者が多いということを考慮して、2017年に前橋駅の徒歩圏内に移転した。同時に、アーツ前橋からもそう遠くない場所に引越しをしてきたわけだ。ここに通うのは、高校生から社会人の若者たちで、常時利用者が10人程度いる。利用者のペースに合わせて運営されているので、特に事前予約も必要なく、その日に来たいと思えば、いつでも若者は足を運ぶことができる。スペースに来て特別なプログラムはなく、ボランティアさんや施設長とおしゃべりをしたり、お昼を作って食べたり、または一人でゆっくりと過ごしたり、ゆったりとした時間が流れる空間だ。学校を中退してアルバイトをしているような若者もいるが、一方で自宅以外にはアリスの広場にしか足を踏み入れられない若者もいる。なぜひきこもりに至ったのかという自分の経験や他の人のように自分でお金を稼がなければと思っているという社会に出られないゆえの後ろめたさのような感情を話してくれることもある。若者たちは、自分の能力をうまく活かしきれない人が多いように感じる。彼らにとって、アーティストという、自分の好きなことを仕事に繋げている人に出会えることは、発見でもあるようだ。彼らとアーティストの滝沢氏との相性は至極良い。2年目の活動に入り、「アリス美術部」という名前で月に1度定期的に活動している。主に以下の3種類の活動を行っている。(1)アリスの広場で、カンヴァスに絵を描いたり、自分のやりたい美術のような活動をする (fig.6)。(2)「ゆったりアーツ」 休館日のアーツ前橋に来て、誰もいないギャラリーで学芸員やアーティストと一緒に企画展を見る (fig.7)。(3)「ゆったりアウトドア」アーティストと一緒に一泊二日で自然の中へ出かける (fig.8)。(1)(2)は、アーツ前橋の主催事業として行っているが、(3)は、アリスの広場が主催、アーツ前橋が協力という形で行っている。1年間の「アリス美



fig.6 アリスの広場で開催したアリス美術部の様子



fig.8 アリスの広場で開催したゆったりアウトドア第一回の様子



fig.7 アーツ前橋の休館日に開催したゆったりアーツの様子

美術部」の活動を通じて、アーティストと利用者との信頼関係だけでなく、利用者間の関係性が生まれ、「滝沢さんと一緒に行ってみたい。」と言ってくれる若者もいるが、「アリスの〇〇ちゃんが行くなら、行ってみたい。」という横のつながりが、美術部の活動を通じて生まれているようだ。自分に負荷をかけ、無理をしないと外へ出ることも難しい若者たちが、こうして定期的にアーツ前橋に来てくれるのは、貴重だ。もちろん休館日という限られた条件ではあるが、アーツ前橋という空間が彼らにとっては、少しずつ居心地の良い場所になっているのは確かだ。

2月には、「身体拡張2018 公園デビュー」という企画をアーツ前橋のギャラリーを使用して行った。これは、美術館空間を公園に見立てて、身体表現を中心にプログラムが組まれたものだったが、この企画の際に、アリスの若者たちが初めて休館日ではない美術館に足を運んでくれた。もちろん、休館日ではないことが、ハードルになって普段は参加してくれるが、この日は参加できなかった若者もいた。ただ、参加してくれた若者たちの中には、楽器を持って参加してくれたボランティアさんと一緒に歌を

歌ったり、漫画を描いたり自分が得意とする活動をしてくれた。活動の後に更新された滝沢の記録には、「生きづらさを抱える人には、社会に合わせる努力よりも、世界の広がりを獲得した方が良いと思っている<sup>00</sup>。」と記されている。彼らにとって、表現をすることやアートという考え方が、彼らの外の世界を覗いてみようという好奇心に繋がってくれたら良いと思う。今年、毎回美術部に参加してくれている女性が、アーツ前橋のサポーターの活動に関心を示してくれ、彼女にとってアーツ前橋が守られた場所として、安心して過ごせる場所として認識され始めているようだった。美術館を自宅ともフリースペースとも異なる居場所として、彼らが認識してくれたら、それだけでも、美術館としてこの活動を続ける意義は大きいと思っている。

表現の森の活動では、アリスの広場を始めその他のプロジェクトでも、アーツ前橋が全ての活動の主催とは限らない。これは、活動自体にゆるやかさを生み出すためだ。相手となる施設や相手となる参加者のいるプログラムで、特に相手の施設を中心に活動を進める場合、アーティストや美術館が全てのプログラムを設計するのは危険だ。相手が何を必要としているのか、また相手にとって私たちは何ができるのか、そうした相手の視点から考えることは、福祉や医療における対象者への配慮とも共通する。もともとあるプログラムやアーティストが設計したプログラムを提供するのではなく、自分の目の前にいる人の反応を読み取りながら、共にプログラムを作る姿勢は、決して簡単なことではないが、このことが時間をかけて活動を継続する意義でもある。表現の森は、まだまだ続く。時には、どこかにゆっくりと立ち寄りしながら、考え続けることもあるだろう

うし、突然に何かプログラムが始動することもあるかもしれない。美術館という行政主導の施設でありながらも、しなやかさを求めて、目の前にいる参加者の微細な心の動きを感じながら、今後もアーティストと共に森を育てていきたいと考えている。

- 
- (1) 朝日新聞 2017年12月30日 朝刊1面
  - (2) ひきこもりの若者が50代、その若者を支える親が80代という社会問題と呼んだ。ひきこもりの長期化と高齢化社会が産んだ新たな貧困の問題を示している。
  - (3) 今井朋「アーツ前橋の取り組み 『表現の森 協働としてのアート』 前橋市内で行ったプロジェクトを中心に」『REAR 38号 障害と創造－当事者として向き合うために－』2016年11月20日発行 リア制作室 pp.71～79
  - (4) 一般財団法人 日本財団 Diversity in The Arts『障害者芸術支援フォーラム～アートの多様性について考える～report』2017年 p.2
  - (5) 社会福祉法人前橋あそか会障害者支援事業あそか会など
  - (6) 石坂玄士「石坂玄士ブログより～ 11/22えいめい文化祭での活動」表現の森特設サイト(<http://www.artsmaebashi.jp/FoE/>) より
  - (7) 実際に大学生が中心になって企画したワークショップの内容は、特設サイト (<http://www.artsmaebashi.jp/FoE/>) を参照のこと。「中島佑太×南橋団地」内の2016年7月2日開催の「旅するお料理図鑑」と2016年11月19日開催の「モウソウジ」の2回が大学生企画のプログラム。ワークショップの内容及び報告が掲載されている。また、中島佑太による記事「群大生と一緒に活動をつくること」も合わせて参照いただきたい。
  - (8) 今井朋「ヨーロッパにおけるアートを利用したソーシャルインクルージョンの実践について」『2015年度 海外研修派遣報告書』美術館連絡協議会 2015年 pp.17-36
  - (9) 平成29年度 文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業「文化芸術による社会包摂型の評価手法・ガイドラインの構築とアート実践による検証研究 地域アートプロジェクトの記録・評価・アーカイブの一体化による障害者及び高齢者等の生の高度化をめざして」
  - (10) 滝沢達史「滝沢達史とアリスの広場 世界の拡張」2018年2月12年更新 表現の森特設サイトより

# アーティスト・イン・スクール 教科のあいだに広がる想像力

小 田 久美子

## (1) はじめに

本稿では、アーツ前橋がアーティストの学校への派遣事業「アーティスト・イン・スクール（以下、AIS）」を2016年度より開始した経緯を述べ、2016-17年度の実践の成果と課題を整理する。そして、平成29年3月に公示された新学習指導要領を参照しながら、本事業が学校教育の中で示すことができる可能性について述べる。

## (2) アーツ前橋の学校連携事業の変遷とAIS開始の経緯

2013年の開館年度以降、アーツ前橋の学校を対象とした事業として、学校団体の受け入れや前橋市内の小学校を対象とした「おしゃべりアートツアー」（2013年～）や「先生のための無料招待ウィーク」（2014年～）を行ってきた。「おしゃべりアートツアー」は、市内の小学生がアーツ前橋の借り上げバスにて学年単位で来館し、研修を受けた鑑賞サポーター（市民ボランティア）と対話による鑑賞をグループで行うプログラムで、市教育委員会の協力も得ながら進めてきたが、授業時数の減少で外出が難しいといった理由で、利用数は年間3～6校の利用にとどまった<sup>(1)</sup>。また、「先生のための無料招待ウィーク」の利用者へ実施しているアンケートによると、「学芸員やアーティストの出張授業」を希望すると回答した教員は47人にのぼり、団体見学や来館しての体験活動などに比べて倍以上の数となっている<sup>(2)</sup>。そして、当館は大人数を一括で受け入れる場所が館内に無く、開館前より地域アートプロジェクトを実施し館外での活動を重視してきているため、事業の見直しを行うこととした。そこで、2016年度よりインリーチ（おしゃべりアートツアー）からアウトリーチに切り替え、アーティストを学校へ派遣する「アーティスト・イン・スクール」を学校連携事業（スクールプログラム）の主な取り組みとして開始した。

## (3) 事業構想—群馬県内の先行事例とまえばしアートスクール計画研究会

群馬県内には多くの美術館があり、各館で学校団体の受け入れのみならず学校へのアウトリーチプログラムを実施している。継続的に実施されている主な例としては、群馬県立近代美術館や群馬県立館林美術館は、収蔵品のアートカードや複製画ポスターなど館独自のツールを用いた学芸員やボランティアによる出張授業があり、高崎市タワー美術館も日本画のオリジナル教材を制作し活用している。この他にも地元の教材会社が、学校の授業へ出張し道具の使い方などの指導を行っている。そして、既に終了しているが、2007年から2008年にかけて「トヨタ・子どもとアーティストとの出会いinぐんま」（事務局：NPO法人前橋芸術週間、2009年シンポジウム開催）として、前橋市内の4つの小学校へそれぞれダンサーや絵本作家を派遣し、保護者や群馬大学教育学部と連携しながら授業としてワークショップや発表を行った<sup>(3)</sup>。そうした県内の状況を踏まえ、現代美術の展覧会企画やアーティスト・イン・レジデンスなど現存するアーティストとの活動が多く、収蔵品も現在幅広く収集中であるアーツ前橋においては「アーティストが学校へ出張する」という形を軸に事業を構想し始めた。

2015年度には、伊勢崎市立宮郷中学校の美術教員からの依頼で、前橋市在住のアーティストで2014年に当館で個展を開催した白川昌生氏を美術部の活動へ派遣した<sup>(4)</sup>。当初は、美術の授業として全8クラスを対象に鑑賞と制作が一体となった内容で実施したいという教員からの要望であったが、当館は前橋市の施設であり行政区を超えた場所で実施する事業へ予算を支出することは難しいという理由から、授業ではなく美術部の部費を用いて現代美術の講義とワークショップを部活の一環として実施した（fig.1）。その際、偶然性を取り入れて抽象画を作るワークショップに加え、アーティストのこれまでの活動について図版を用いて紹介し、無人駅のホームで地元の工場で生産されているカップ焼きそばを食べるパフォーマンス《無人駅での行為（群馬と食）》などが強く生徒たちの関心を引き付けた。「白川さ

んの話を書いて、たくさんの引き出しを作ることができました」といった従来の美術のイメージが拡張されたという感想や、「私はアートとはなんだろうと思っていましたが、白川昌生さんのお話を聞き、アートとは自分の中にある自分の思いを描くものなのだと思います」という感想があった。50分という短い1回限りのプログラムであったが、アーティストを通して未知の表現や生き方に出会うことは、美術の幅広さを知るだけでなく、生徒自身の表現方法の選択肢や可能性を広げる機会になると確認することが出来た。



fig.1 白川昌生氏による出張授業

パイロット事業として開始する2016年度には、5月に茂木一司氏（群馬大学教授）、春原史寛氏（同准教授）、山重徹夫氏（中之条ビエンナーレディレクター）、海沼仁氏（前橋市教育委員会指導主事）、中島佑太氏（アーティスト）、茂木克浩氏（群馬大学院生、教員）らと意見交換を行った。テストケースを積み上げるにあたっての協力校を想定し、全国的にも珍しい滞在型のアーティストの派遣事業を行っている北海道の一般社団法人AISプランニングや、出張授業からギャラリーでの成果展示まで行う埼玉県川口市立アートギャラリー・アトリアなど他県での実践例、中島氏が茨城県守谷市で行った滞在型のAISの実施状況を共有した。「子どもと遊ぶ、一緒に作るという分かりやすい“関わり方”もあるが、例えば空き教室でアーティストが滞在制作をしていて、それを子どもが休み時間に覗きにきてちょっと作品が変わったとを感じるような一見分かりづらい“関わり方”もあると思う。その辺りを学校へ説明し、伝えていく努力が必要。いわゆる分かりやすい“関わり”を求めると続かなくなると思う」という声や、「例えば、アニメを制作するとしたら、数学の知識

も必要になってくるので、図工・美術から他の教科や他領域への広がりやを想定しても良いのではないか」という意見が出された。10月には、アーツ前橋と群馬大学で組織した「まえばしアートスクール研究会」にて、市内の教員らへアーツ前橋はAISを構想中でありどのような企画があったらいいか投げかけたが、なかなか現場での実践イメージをもつことが難しかった。1月には、東京都内で2000年度よりアーティストの派遣事業を幅広くコーディネートしているNPO法人芸術家と子どもたちの代表・堤康彦氏を同研究会へ招き「アーティストが子どものいる場所に行く意味～学校や児童養護施設でのワークショップの実践～」と題して講演を企画した。実際の子どもの反応や運営体制、活動の意義、学校だけではなく社会的養護が必要な子どもを対象とした福祉施設へのプログラムも合わせて紹介され、県内の教員やアーティストなどと意見交換を行った<sup>(5)</sup>。

#### (4) 2016年度一パイロット事業としての実践

これまで述べてきた意見交換や有識者による講演などと並行しながら、パイロット事業として2016年度は最もコンパクトな形式として単発の出張授業を始めることとし、アーツ前橋とこれまで関係のある2校で実施した。プログラムの概要や当日のプログラムの流れは、アーツ前橋公式サイトに掲載しているAIS報告書(pdf)やyoutubeチャンネルで公開している映像を参照していただき<sup>(6)</sup>、本稿ではそれに記載できなかった企画意図や課題を主に記述する。

##### 1校目：ジル・スタッサー×群馬県立勢多農林高校

農業部の学生9名、フードビジネスコースの学生4名に対してジル・スタッサー氏のトークとワークショップを実施した(fig.2)。実施の経緯は、当時開催していた食をテーマにした「フードスケープ 私たちは食べものでできている」展で、スタッサー氏が赤城南麓の生産者とともにオリジナルサンドイッチを制作してカフェで提供し、その生産者の1つとして勢多農林高校の高校生にルッコラの栽培を依頼したことによる。サンドイッチ制作時点では、撮影で生徒たちに1回会ったのみにとどまっていたので、これまでのアーティストの活動を紹介するトークとアーティストの発想を追体験できるようなワークショップ、他の生産者との交流を計画した。

具体的には、3～4人のグループに分かれて、学校内で見つけた3つの道具と材料を使って、実現可能なレシピを考える活動を行った。事前に農業部の学生は来館し、展覧会も鑑賞した。



fig.2 校内を歩いて食材を探す

「想像力」や「料理」をキーワードにしてトークやワークショップを進行したことで、一見無関係そうに見える農業とアートの境界がほぐされ、生徒たちも楽しみながらレシピ作りに取り組んでいるようだった。毎日見慣れた校内を想像力を働かせながら見て歩くことは、一見ただの遊びのように思えるかもしれない。だが、アーティストがもうひとつ大事にしていたのは「実現可能なものとする」ということで、レシピ作りや発表の際にはそれを踏まえてアドバイスを行っていった。料理人でもあるアーティストの幅広い知識をもとに、味や見た目、火の通り方等細かくコメントしたので、それに刺激を受けて生徒たちも真剣に取り組んでいった。課題としては、ワークショップが1回で終わることの不完全燃焼感是否めず、アーティストは今後もプロジェクトとして実際に料理を作るところまで進めたいと言っていたが、今回は実現に至らなかった。公立の施設として学校を対象とした事業の場合、単年度予算であるということや他の学校へ活動を広げていくという観点も無視できないが、AISで芽生えたアイデアや関係性をどのように継続発展していくのか、検討が必要である。

## 2校目：石坂玄士×前橋市立月田小学校

2年生11名を対象に、2年生の楽器を作る既存の図工の題材「ときめきコンサート」に、神楽太鼓奏者の石坂玄士氏を派遣した。アーティストの生演奏を聞き、世界各国の楽器に触れて体験することから発想を広げ、身近な材料でオリジナルの楽器を創作

した。最後は、制作した楽器で即興ライブ(演奏会)をひらいた(fig.3)。



fig.3 石坂氏の導きで即興ライブをする子どもたち

最初の鑑賞と体験の時間は、1、3、4年生や事前に学校を通して案内を送付し、関心のある保護者も参加した。月田小学校は、図工の担当校長が当時在籍していた学校であり、当館から車で40分程度の離れた小規模校である。アーツ前橋としては、美術と他領域のコラボレーションを希望していることを伝えた上で候補のアーティストを挙げて意見交換をし、2年生の3学期に行う同題材であればコラボレーションが実現できることになった。NPO法人芸術家と子どもたちでのプログラムなど学校への出張授業の経験の多く、以前都内で楽器作りと即興演奏を組み合わせた授業を行った石坂玄士氏を派遣アーティストとした。終了後の教員へのインタビューによると、子どもたちが演奏や制作を自由にかつ勢力的に行っている姿が見られ、教員からも普段の授業では見られない反応があったとの声があった。本時以外でも音楽や生活の授業で制作を進めたり再度演奏をしたり、作品の補修や作品(楽器)タイトルを付ける活動や子どもに作品についてのインタビューを行うなど、教員が独自に発展または補完したとのことであった。実施した授業の内容は、子どもたちが作りたかったものにアーティストや補助のスタッフが寄り添って必要に応じてアドバイスを行うにとどめ、作品の完成度そのものよりは出来上がった作品を使ってアーティストと即興演奏を通したコミュニケーションを行うことに重点を置いていた。担当教員は、既存の楽器の構造を踏まえた上でより音が鳴るなどといった作品自体への指導が入ると想定したようで意外だったとのことであった。今回は授業として行っていたため、ねらい、身につけさせたい資質能力、第1週と2週の間の進め方などにつ

いて、事前によりきめ細かい想定とすり合わせが必要だった。

#### (5) 2017年度一中学校と中～長期間での実践

前年度の成果と課題を受けて、2017年度は美術教育の専門家がメンバーであるNPO法人まえばしプロジェクトへコーディネートを受託し、共同で事業を進行した。プログラムによって異なるが、NPOは学校との打ち合わせ、補助スタッフ（大学生等）の派遣、記録物の制作などを担当し、アーツ前橋は事業計画、進行管理、アーティストとの調整を担当した。

##### 1校目：住中浩史×前橋市立第六中学校

パイロット事業として開始した2016年度は、授業時間の中で小学校と高校で行ったため、本年度は中学校で授業時数に影響のない形として余裕教室にアーティストが滞在し、中長期に児童・生徒と交流する形式の実践を企画した。そこで、「とがびアートプロジェクト」（中平千尋氏企画、長野県千曲市立戸倉上山田中学校ほか、2004～2013年）など、中学校で滞在型のプログラム経験のあるアーティストの住中浩史氏を招聘した。10月16日より20日間中学校の少人数教室に滞在し、美術部の1～2年生の生徒たちを中心にアーティストと共に作る「アーツ六中プロジェクト」を展開した。学校でしてみたいことや流行っていることといった生徒や教員の声も反映しながら、「誰かが何かをしたくなるアイテムや空間」を美術部の生徒たちと制作。天板が黒板でできているテーブル、キャンパス地の屏風、屋台、数学の教員が制作を依頼した「壁面ピタゴラ装置」、生徒が自主的に表現できる空間「カオスギャラリー」など、合計10アイテムが完成した。アイテムは、滞在最終日の学習発表会で全校生徒や保護者へ公開し、住中氏が去った後も学校に残され、校内の活動で活用されていく予定である。また、11月3日に番外編として、出来上がったアイテムのある空間で生徒たちや教員、アーティスト、補助スタッフの学生らにプロジェクトの感想を聞き、共有する会を設けた（fig.4）。第六中学校の美術部は、前橋の七夕祭りに作品を出品して受賞したり、ボランティア活動で小学生に工作を教えるイベントに参加したり積極的に活動しており、生徒たちも好奇心が旺盛な様子であった。特に1年生は、イラストなど小さなサイズ

の平面作品を制作していることが多かったが、今回は電動ドリルの使用方法を学び、大きい画面へのライブペインティングを行うなど新たな挑戦をする機会になった。ちょうど学習発表会前の時期で、2年生はそこで発表するコマ撮りアニメを制作しており「アーツ六中プロジェクト」へ多く関わることができなかったが、住中氏は部活に滞在しながらその制作アドバイスも行った。プロジェクトに直接参加できなかった生徒による感想では「部屋がどんどん変化しているのに驚いた」、「プロジェクトにも参加しなかった」との声もあった。



fig.4 完成したアイテムを使っでの交流会

課題としては、本プロジェクトは、始まる半年前から学校長らと打ち合わせやアーティストとの顔合わせを行い実施したが、住中氏自体が何か事前に計画したものや既存のプログラムを持ち込むのではなく、そこにある場や人と対話しながらテーマを設定して制作を進めていくスタイルのため、「何が最終的に出来上がるのか」、「生徒たちにどのような学びがあるのか」学校側と事前にイメージを共有することが難しかった。また、当初は休み時間も開放して美術部を中心にしつつも、関心のある他の生徒たちもプロジェクトに参加することを想定していたが、他の学年の教員から生徒が落ち着かなくなるのではないかと懸念が出され、最終的には原則美術部の生徒のみとした。滞在期間もアイテムの完成と公開後にそれを活用する段階までを希望していたが、中学校3年生が受験に入る前の学習発表会を最終日とした。以上のように、全てがアーティストや主催者側の希望通りに進行したわけではなかったが、住中氏の「今回はパソコンでいえばハードを設置した状態で、ソフトは六中の皆さんで作って動かしてほしい」との言葉は少しずつ実現している。例えば、他のグループ活動をする教室へ対話に向けたテーブ

ルが移設されて使用され、カオスギャラリーではその後も継続的に展示が生徒によって行われていると教員より報告があった。これはプロジェクトに粘り強く伴走している、担当の美術教員の学校内での働きかけや努力によるところが大きい。住中氏もプロジェクト終了後も前橋来訪の際には学校へ足を運び、その後の状況を共有している。住中氏から今回とはまたタイプの違うアーティストを派遣すると良いのではないかとのアイデアもあり、何らかの継続発展を実現したい<sup>(7)</sup>。

## 2校目：山川冬樹×前橋市立みずき中学校

アーツ前橋の秋の企画展「ヒツクリコ ガツクリコ ことばの生まれる場所」展の参加アーティストである山川冬樹氏を派遣し、中学校3年生1クラスにて「総合」の時間に12月15日(金) 13:40~15:30の2コマ100分の授業を行った (fig.5)。



fig.5 山川氏のパフォーマンスを鑑賞する生徒

受験前の時期ということで、美術教員が担任のクラスのみの実施とした。まず、喉歌であるホームエイと楽器のイギルで、自己紹介代わりにパフォーマンスを披露。山川氏自身が音楽や現代美術、舞台芸術といった3つの分野を横断しながら表現しているが、共通しているのは「身体」からはじまる表現であるという切り口でスタートした。実際に山川氏が発する「パ」という音節を作品として100万円で売ったという生徒からも驚く反応が多かった話から、アイデアや考えそのものが作品になるということ、物の価値や所有することに対する問題提起を行う意図があったことを説明した。次に、ホームエイが生まれたトゥバ共和国の話や、ホームエイは風や家畜、川のせせらぎなど絵でスケッチをするように声で絵を描くという考え方がベースとなり、大切なのは自分の声や世界の音を「よく聴くこと」であると伝えられ

た。その後にホームエイに全員で挑戦した。その際、自分の発する音は倍音に聴こえないが、隣の生徒の音が倍音に聴こえたという現象が起こり、音のピントが合う位置がそれぞれにあることが体感出来たようだった。次に、身体とテクノロジーを組み合わせた表現として、心臓の鼓動を音と光の明滅に変換し、骨伝導マイクを使って頭を手で叩く音や歯を噛み合わせる音を信号に変えてシンバルが鳴るなど、テクノロジーによって身体を拡張する方法を紹介。生徒にも何人か体験してもらい、ホームエイを現代的な社会の中でリアリティのある形で表現することを追及しているというアーティストの表現意図も話された。これまで見たり聞いたりしたことがなく、何を表しているのかすぐに分からないパフォーマンスや作品は、自分の生活には関係ないと捉えがちである。しかし、今回のように丁寧に紐解いていくと、自分の身体、学校で学んでいる歴史や社会、遠い国のこと、身近にあるテクノロジーなど様々な要素が根底にあり、教科や分野で容易に分断できない表現も存在することが体感的に理解できたのではないだろうか。終了後に実施した生徒へのアンケートでは「自分が普段生活している中で五感で感じとれないようなものを自分なりに工夫して感じとろうとすることは、自分が新たな発見をしてつながる、大切なことだと知ることができた。また、自分が感じられなかった部分を、見たり聞いたりできたのはとても新鮮で不思議だったが何か新たなことを見つけられるような気がした。今後の生活にも活かせる、とても貴重な経験だった」、「普段あまり美術に興味を持ったりすることはなかったけれど、この時間で様々なジャンルの楽しさを学び知ることができました。体ひとつでこんなことができるんだと不思議でおもしろかったです」といった声があった。今回の授業については、山川氏が東京都現代美術館の教育普及アウトリーチ・プログラムとして小学校で行っていた授業を、中学生向けに実施した<sup>(8)</sup>。事前にその記録集などを活用して打ち合わせを行っていたため、ある程度の進行や内容は担当教員と共有できていたが、授業終了後に学校長をはじめ参観していた教員が、「このような素晴らしい授業であれば、他の教員や生徒たちにも見せたかった」と言っていたため、事前の段階では学校側が本事業内容の理解は十分に得られていなかったのだと感じた。なかなか実際に体験しないとその意義が分からない部分もあると思うが、

今後へ向けて様々な形態を試しながら記録や映像などを蓄積し、少しでも理解とイメージが出来るようにしながら進めていきたい。

### 3校目：中島佑太×前橋市立桃川小学校

本紀要に今井が報告している「表現の森」の継続事業として、中島佑太氏が桃川小学校へ長期的に通うプロジェクトも始動した。桃川小学校は、表現の森のプロジェクトを行っている南橋団地が校区に含まれており、同時並行で南橋公民館等でもワークショップを実施している。2017年10月から小学校3～6年生の図工の授業に補助教員のような形で入り、子どもたちの主体性や創造力、題材の魅力などをアーティスト独自の視点で引き出している(fig.6)。なお、本事業については中島氏より表現の森特設サイト (<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>) に報告が掲載されている。子どもたちの学校での様子や、限られた授業時間の中での学びの実現に対する難しさや葛藤も時に記述されている。事前の意見交換会で挙げられていたアーティストと子どもたちの交流という“分かりやすい関わり”だけではなく、またそうしたものを受けてすぐにワークショップやプログラムに反映されるわけでもないが、アーティスト自身の関心や発想に接続されていく過程が見えて興味深い。つまり、アーティストは補助教員という一見学校に教えに来ている立場のように見えるが、彼自身も現場の状況から思考し、活動やワークショップのヒントを得るという双方向の学びにつながっているのではないだろうか。



fig.6 木版画の授業に参加する中島氏

アウトリーチのプログラムは、短い期間の中で高い成果を求められがちであるが、学校と美術館、校区である南橋団地などを行き来し、教員や児童と関係を築き、何度も対話しながら時間をかけることで

見えてくる成果や、AISの可能性もあるだろう。

### (6) 成果と課題

以上、過去2カ年のAISの企画意図や概要と課題を述べてきた。アンケートや教員へのインタビューを元にした主な成果を整理すると以下の通りである。①美術・アート自体の幅広さを知り、日常とアートがつながる瞬間を提供できた、②アーティストという存在やそのパフォーマンス、言葉などが児童・生徒の図工・美術への関心を高めた、③アーティストと児童・生徒、児童・生徒同士のコミュニケーションが生まれた、④アーツ前橋という存在を知り、来館する意欲につながった、⑤NPOなど、外部団体との連携も構築されつつある。

課題としては、(A)学校側との具体的な活動内容のイメージや児童・生徒へどんな意義があるのかといった、目指すべきビジョンの共有が難しい、(B)長期的な学びの実現、ということが挙げられるだろう。(A)は根本的な大きな課題であり、これがプログラムの実施規模や進行に影響している。特に中学校での実践では、学校の中に「自由なアート」が入って来た際の生徒への影響など教員にとっては不安がある中で最大限協力を得て実践しているが、限定的な受け入れにとどまっている。学校側にとっては、年間指導計画の中でAISをどこに位置づけるか、どのように児童・生徒の学びを評価するかという視点が欠かせず、地域の美術館が行うプログラムとしては、こうした活動がアーティストにとっても単なるプロフェッショナルの技術を教えるだけの機会ではなく、新しいアイデアが生まれ、アーティスト自身の活動へのフィードバックを得られるなど意義のあるものにする—つまり、アーティストと児童・生徒が双方向に関わり合い、学び合うプログラムにする必要がある。そうしたアート側の期待する側面が、学校側にとっては「受け入れ」の難しさにつながっていると考えている。しかし、少しずつこれまでの活動内容を学校関係者へ広げていき、NPOと共に事前に学校側で打ち合わせてしておくべき内容や学校内での情報共有のフローを確立していくことで、アーティストと児童・生徒の間に立つスタッフや教員とのビジョンづくりや共有を通した関係性が構築され、それに伴い実施内容も改善していくと思われる。(B)については、川口市立アートギャラリー・アトリアの実践のように前年度より計画や調整を行い年間指

導計画の中に組み入れる、住中氏のように部活を中心とした活動を想定し授業時数に影響のない形を想定する、中島氏のように既存の授業の中に補助教員のような形で入ることから始めるといったプログラム自体が長期のものも設定できる。また、単発のプログラムを行ったとしても、その後の展開を教員が作っていった石坂氏のような形や、アーティストがワークショップを実施しなくても学校を再訪し、子どもたちのその後の様子を見に行く機会を設定することも想定していいだろう。

## (7) 新学習指導要領とA I Sの可能性

アーツ前橋では、美術や図工と聞いて一般的にイメージのしやすい絵画や彫刻などの分野ではなく、農業や料理、即興音楽、空間デザイン、身体表現のアーティストをこれまで招聘し、多くはグループ学習や協働制作を取り入れている。これは、前述の事業構想で出された意見を踏まえつつ、美術だけではなく様々な領域の間を行き来しながら活動し、美術の専門家だけではない人々と共に制作するアーティストが増えていることとも呼応している。そして、平成29年3月に公示された新学習指導要領を踏まえても、これからの学びにおいてこうした領域横断的な活動を行うアーティストの能力は相性が良く、学校教育に貢献できるのではないかと考えている。

新学習指導要領においては図工・美術の授業時間数は据え置きとされているが、現場の教員からは前指導要領改訂時の時間数削減によって週1コマを確保できない場合もあり、授業づくりに苦慮しているとの声を聞く。更に、学習内容が予測困難な現代社会の中で生きていくために、どのように関係しているのかを子どもたちが実感できるようにするため、身につける資質・能力や評価の観点、現行の「美術（造形）への関心・意欲・態度」、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」、「鑑賞の能力」の4つから、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つへ変更され、これまで図工・美術独自の枠組みから全教科統一のものとなった<sup>9)</sup>。図工・美術の指導要領にある「造形的な見方・考え方」を身につけつつも、それ以外の教科と連携・横断しながらの授業づくり、他教科の中に図工・美術の強みである造形要素を意識した表現、幅広い想像力や感性に訴える表現を交えながらの活動がより一層想定しやすくなるのではないかと考え

ている。スタッサール氏、石坂氏、山川氏などの授業はそうした事例として捉えることもできるだろう。一方で、図工・美術を単なる「色・形」といった造形のみにとどめず、山川氏が「パ」を売ったように形のないアイデアが作品になるといった美術表現の広がりについても、意識しておきたい。

合わせて新指導要領には、「社会に開かれた教育課程」の理念や「主体的・対話的で深い学び」を実現するよう明記されている。地域におけるアートプロジェクトで、その土地特有の歴史や文化、あるいは社会課題などから地元住民や他分野の専門家とプロジェクトを行うアーティストも増えており、学校が置かれている地域の歴史や特徴、重点的に取り組んでいる内容から、アーティストや図工・美術の教員やそれ以外の科目の教員と共にプロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）型の授業や部活動を立ち上げていくこともできるだろう。住中氏の事例は、生徒と学校生活について考えることから始め、それを元にアイテムをデザインして作り、豊かな学校生活や六中独自の文化を発信していく環境作りを行うという状況をアーティストが設定した。その過程で生徒は物を作る技術を身につけ、アイテムを使って学校の中で自分自身の表現の発表を行う際に、教員や他の生徒といった他者とのコミュニケーションが不可欠になるなど、PBLを展開しやすい環境ができた形である。

更に、アーティストにとっては「どのように表現するか」ということもあるが、「なぜ表現するのか」という動機、主体性が一番重要であろう。学校教育の中では、年間指導計画に応じて教員が題材を設定して授業が行われているが、いくつかその導入・動機付けが弱く、「なぜこの題材を今行うのか」という視点が抜け落ちている実践も目にする。アーティストは、普段の子どもの様子は知らずプログラム実施当日だけ訪れる存在であるが、スタッサール氏の「世界一大きなわたあめ」や「溶けたアスファルトを使った料理」などインパクトのある事例で生徒の関心を引きつけ、石坂氏のようにパフォーマンスを見せたり楽器に触れさせたりすることを通して音や楽器づくりに対する興味を喚起し、山川氏は見慣れないが迫力のあるパフォーマンスや楽器を、絵本『スーホの白い馬』（再話：大塚勇三、画：赤羽末吉、福音館書店、1967年）の例を出しながら、生徒が既に知っていることと丁寧にリンクさせながら解説

して授業を行うなど、その専門的な能力、パフォーマンスによって児童・生徒の表情が変わり、関心が徐々に高まっていく様子が見られた。中島氏の桃川小学校でのAISにおいても、教員とは別の観点から題材の可能性を見出すアーティストの思考や言動が、児童の創作意欲を高める場面が見られた。当初想定されていたテーマや教材に沿ってキット教材や先輩の完成作品を参考にしてアイディアスケッチをして制作するという計画性を元にした一直線の進行ではなく、まずは素材に触れて素材やそれが生み出す動きの面白さを体感的に見つけた上で、作りたいものを考えていくことを示し、頭の中だけ考えるのではなく手で考えていく、アイディアスケッチをしてみる、他の人と一緒に再び素材を試し、アイディアを交換してみるといった試行錯誤を楽しんでいる様子が見られた。これらは、「主体的・対話的で深い学び」の火付け役にアーティストがなったと言ってもいいのではないだろうか。

#### (8) おわりに

中島佑太×桃川小学校のプログラムのコーディネーターである春原史寛氏が「朝日ぐんま」に寄稿した記事には、「アーティストを職業とした専門的な思考・知識・技術を持つ大人の、『やりたいことをやること』、『誰かと一緒に表現すること』、『人と自分の違いを認めること』、『わからないことや失敗を面白がれる態度』は本来、すべての人の生活の充実にとって大切なことです。学校教育という重要かつ独自のルール下と限られた授業時間数では取り入れにくい要素ですが、アーティストが学校内に多様性を持ち込み刺激します。この過程で子どもたちが活性化され、先生や私自身の、学校・子どもたちの可能性についての見方が変わったように思います。」とあり<sup>10)</sup>、アーティストの専門性と学校が出会ったときに起こる可能性について記述されている。どんな作品が出来上がるのか予め分かっていたとするならば、完成に向かう過程は学びではなく作業になり、計画通りにいかなければただの失敗になる。新学習指導要領にも「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に

付けられるようにすることが重要である（後略）」と記載されている<sup>11)</sup>。AIS事業自体も、現時点では定型を決めず他館や他団体の先行事例を学びながら、前橋の地でのより良い形を求めて模索中である。将来的には、学校にとっても単なる外部からの「受け入れ」事業ではなく、「未知のものをアーティスト共に創造していくことを通した学び」をアーティスト、学校、NPO、美術館と協働で実現したい。

- (1) 前橋市立の小学校数は47校（2017年現在）。実施校数は2013～2016年度のもの。おしゃべりアートツアーでは、この他に群馬県立聾学校など前橋市内に所在する県立学校の利用もあった。詳細は2013～2016年度の『アーツ前橋 年報』を参照。なお、研修で育成している鑑賞サポーターも、2016年度よりアーツナビゲーターと改称し、一般来館者を対象とした対話による鑑賞のファシリテータの活動を開始した
- (2) 2014～2017年に7回実施してきたアンケートの集計結果による。選択式（複数回答可）で、各項目と希望者数は「1.学芸員やアーティストの出張授業」（47人）、「2.アーツ前橋に来館しての工作教室などの創作活動体験」（14人）、「3.団体見学プログラム」（6人）、「4.ワークシートやガイドブック、作品画像を印刷したアートカードなど授業で使えるツールの貸出」（13人）、「5.教職員向けの芸術や文化に関する研修や講座」（26人）、「7.アーツ前橋と先生が協働した授業やプログラムの企画・実施」（22人）
- (3) 『トヨタ・子どもとアーティストとの出会い 活動レポート 2003-2013年度版』（2014年6月、監修：NPO法人芸術家と子どもたち、発行：トヨタ自動車株式会社 社会貢献推進部）
- (4) 『アーツ前橋 年報No.03 2015年度（平成27年度）』p.24
- (5) NPO法人芸術家と子どもたちの公式サイト（<http://www.children-art.net/>）アクセス日：2018.2.25
- (6) アーツ前橋公式サイトの該当ページ（<http://www.artismaebashi.jp/?p=8261>）アクセス日：2018.2.25
- (7) 「アーツ六中プロジェクト」については、美術科教育学会（2018年3月）にて「アーティスト・イン・スクール（AIS）の挑戦～美術館×アーティスト×中学生の可能性とは・実践内容と今後の展望～」（鈴木紗代・住中浩史・小田久美子・茂木一司）でも報告予定
- (8) 『東京都現代美術館 教育普及アウトリーチ・プログラム2016「GO WEST 西へ!!」“多摩地区限定”アーティストの一日学校訪問」記録集』（2017年、東京都現代美術館発行）
- (9) 文部科学省HP内『小学校学習指導要領解説』（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1387014.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm)）及び『中学校学習指導要領解説』（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1387016.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm)）アクセス日：2018.2.25
- (10) 春原史寛「地域繚乱Vol.81 学校の美術教育にアートの多様性を繋げる試み」朝日新聞姉妹紙 朝日ぐんま2018年2月9日付（<http://www.asahigunma.com/ryouran/180209.html>）アクセス日：2018.2.25
- (11) 注<sup>9)</sup>の図画工作編、美術編p.3

# 田中青坪 日本美術院展覧会出品リスト

辻 瑞 生

凡例)

- ・本リストは、2016年にアーツ前橋で開催した展覧会「田中青坪 永遠のモダンボーイ」の調査で作成したリストをもとに、加筆した。
- ・作成にあたっては「日本美術院百年史」5～14巻（財団法人日本美術院）を参考にした。
- ・作品画像については、「日本美術院百年史」から一部を転載し、展覧調査の過程で鮮明な作品画像が見つかったもの

については画像を差し替えた。

- ・リストは、作品画像、作品名、出品年、出品展覧会(受賞)、所蔵先、画像の出典、日本美術院百年史の掲載巻頁の順に記載した。
- ・所蔵先は、所在不明のものは空欄とし、2018年3月時点で確認できた所蔵先を記載した。
- ・画像の出典にある「絵葉書」は個人蔵、「画像」は前出の展覧会準備の際に、当館で撮影したものである。

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名 | 出品年                 | 展覧会名                         | 所蔵  | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載 |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-----|---------------------|------------------------------|-----|-------|--------------|
| 1   |   | 早春  | 1922<br>(大正11)<br>年 | 第8回日本美術院試作展覧会                |     | 絵葉書   | —            |
| 2   | —                                                                                   | 少女  | 1923<br>(大正12)<br>年 | 第9回日本美術院試作展覧会<br>(日本美術院賞二席)  |     | —     | —            |
| 3   |  | 子女図 | 1924<br>(大正13)<br>年 | 再興第11回院展（初入選）                |     | 絵葉書   | 5巻551頁       |
| 4   |  | 童女  | 1925<br>(大正14)<br>年 | 第11回日本美術院試作展覧会<br>(日本美術院賞一席) | 個人蔵 | 画像    | —            |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名        | 出品年                 | 展覧会名           | 所蔵          | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載     |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------------|---------------------|----------------|-------------|-------|------------------|
| 5   |    | 華夏麗人       | 1925<br>(大正14)<br>年 | 再興第12回院展       |             | 絵葉書   | 5巻585頁           |
| 6   |    | 緑蔭少女       | 1926<br>(大正15)<br>年 | 再興第13回院展       |             | 絵葉書   | 5巻634頁           |
| 7   | —                                                                                   | 竹林遊猿       | 1927<br>(昭和2)<br>年  | 第12回日本美術院試作展覧会 |             | —     | —                |
| 8   |  | 竹林秋粧       | 1927<br>(昭和2)<br>年  | 再興第14回院展       | 個人蔵         | 画像    | 5巻250頁<br>5巻685頁 |
| 9   | —                                                                                   | 残る秋        | 1928<br>(昭和3)<br>年  | 第13回日本美術院試作展覧会 |             | —     | —                |
| 10  |  | 東籬新秋       | 1928<br>(昭和3)<br>年  | 再興第15回院展       |             | 絵葉書   | 5巻730頁           |
| 11  |  | 花による<br>少女 | 1929<br>(昭和4)<br>年  | 再興第16回院展       | 熊本県立美<br>術館 | 画像    | 6巻192頁<br>6巻430頁 |

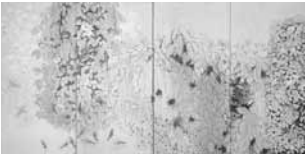
| No. | 作品画像                                                                                | 作品名  | 出品年                 | 展覧会名           | 所蔵    | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載     |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------|---------------------|----------------|-------|-------|------------------|
| 12  |    | 荒園新秋 | 1930<br>(昭和5)<br>年  | 再興第17回院展       |       | 絵葉書   | 6巻500頁           |
| 13  |    | 秋叢遊犬 | 1931<br>(昭和6)<br>年  | 再興第18回院展       | 永青文庫  | 画像    | 6巻561頁           |
| 14  |    | 少女   | 1932<br>(昭和7)<br>年  | 第16回日本美術院試作展覧会 | アーツ前橋 | 画像    | —                |
| 15  |   | 孔雀   | 1932<br>(昭和7)<br>年  | 再興第19回院展       | 永青文庫  | 画像    | 6巻193頁<br>6巻610頁 |
| 16  |  | 和春   | 1934<br>(昭和9)<br>年  | 再興第21回院展       |       | 絵葉書   | 6巻734頁           |
| 17  |  | ヒマワリ | 1936<br>(昭和11)<br>年 | 再興第23回院展       |       | 院展史   | 6巻815頁           |
| 18  |  | ダリヤ  | 1936<br>(昭和11)<br>年 | 再興第23回院展       |       | 絵葉書   | 6巻815頁           |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名  | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵        | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載     |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------|---------------------|----------|-----------|-------|------------------|
| 19  |    | 花と少女 | 1938<br>(昭和13)<br>年 | 再興第25回院展 |           | 絵葉書   | 7巻418頁           |
| 20  |    | 白日夢  | 1941<br>(昭和16)<br>年 | 再興第28回院展 |           | 絵葉書   | 7巻558頁           |
| 21  |   | 雨日   | 1942<br>(昭和17)<br>年 | 再興第29回院展 |           | 絵葉書   | 7巻601頁           |
| 22  |  | 竹筍   | 1943<br>(昭和18)<br>年 | 再興第30回院展 | 永青文庫      | 画像    | 7巻161頁<br>7巻645頁 |
| 23  | —                                                                                   | 百合   | 1946<br>(昭和21)<br>年 | 再興第31回院展 |           | —     | —                |
| 24  |  | 春苑   | 1948<br>(昭和23)<br>年 | 再興第33回院展 | 群馬県立近代美術館 | 画像    | 8巻97頁<br>8巻453頁  |
| 25  | —                                                                                   | 池畔   | 1949<br>(昭和24)<br>年 | 再興第34回院展 |           | —     | —                |

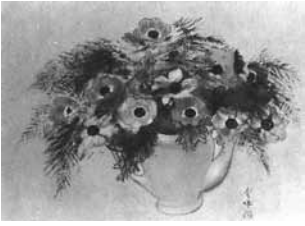
| No. | 作品画像                                                                                | 作品名        | 出品年                 | 展覧会名        | 所蔵              | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載    |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------------|---------------------|-------------|-----------------|-------|-----------------|
| 26  |    | バレリー<br>ーナ | 1950<br>(昭和25)<br>年 | 再興第35回院展    | アーツ前橋           | 画像    | 8巻96頁<br>8巻496頁 |
| 27  | —                                                                                   | 花          | 1951<br>(昭和26)<br>年 | 第6回日本美術院小品展 |                 | —     | —               |
| 28  |    | 竹林         | 1951<br>(昭和26)<br>年 | 再興第36回院展    |                 | 絵葉書   | 8巻516頁          |
| 29  | —                                                                                   | 花          | 1952<br>(昭和27)<br>年 | 第7回日本美術院小品展 |                 | —     | —               |
| 30  |  | 月昇ル        | 1952<br>(昭和27)<br>年 | 再興第37回院展    |                 | 絵葉書   | 8巻541頁          |
| 31  |  | 月あかり       | 1953<br>(昭和28)<br>年 | 再興第38回院展    |                 | 絵葉書   | 8巻569頁          |
| 32  |  | 白馬行        | 1954<br>(昭和29)<br>年 | 再興第39回院展    | 東京藝術大学<br>大学美術館 | 院展史   | 8巻97頁<br>8巻604頁 |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名 | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵           | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載    |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-----|---------------------|----------|--------------|-------|-----------------|
| 33  |    | 窓辺  | 1955<br>(昭和30)<br>年 | 再興第40回院展 |              | 絵葉書   | 8巻645頁          |
| 34  |    | 室内  | 1956<br>(昭和31)<br>年 | 再興第41回院展 | 東京都現代<br>美術館 | 画像    | 9巻372頁          |
| 35  |   | 裸婦  | 1956<br>(昭和31)<br>年 | 再興第41回院展 | アーツ前橋        | 画像    | 9巻63頁<br>9巻372頁 |
| 36  |  | 浴室  | 1957<br>(昭和32)<br>年 | 再興第42回院展 |              | 絵葉書   | 9巻409頁          |
| 37  |  | 裸婦  | 1958<br>(昭和33)<br>年 | 再興第43回院展 |              | 院展史   | 9巻446頁          |
| 38  |  | S婦人 | 1959<br>(昭和34)<br>年 | 再興第44回院展 | アーツ前橋        | 画像    | 9巻64頁<br>9巻483頁 |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名  | 出品年                 | 展覧会名         | 所蔵              | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載    |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------|---------------------|--------------|-----------------|-------|-----------------|
| 39  |    | 裸婦   | 1960<br>(昭和35)<br>年 | 再興第45回院展     | アーツ前橋           | 画像    | 9巻65頁<br>9巻518頁 |
| 40  | —                                                                                   | 民家   | 1961<br>(昭和36)<br>年 | 第16回日本美術院春季展 |                 | —     | —               |
| 41  |   | 裸婦   | 1961<br>(昭和36)<br>年 | 再興第46回院展     | 東京藝術大学<br>大学美術館 | 院展史   | 9巻66頁<br>9巻557頁 |
| 42  | —                                                                                   | 冬の公園 | 1962<br>(昭和37)<br>年 | 第17回日本美術院春季展 |                 | —     | —               |
| 43  |  | 緑の幻想 | 1962<br>(昭和37)<br>年 | 再興第47回院展     |                 | 絵葉書   | 10巻285頁         |
| 44  |  | 早春   | 1963<br>(昭和38)<br>年 | 第18回日本美術院春季展 | 個人蔵             | 画像    | 10巻474頁         |
| 45  |  | 緑の交錯 | 1963<br>(昭和38)<br>年 | 再興第48回院展     |                 | 絵葉書   | 10巻319頁         |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名  | 出品年                 | 展覧会名         | 所蔵              | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載      |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------|---------------------|--------------|-----------------|-------|-------------------|
| 46  |    | 春信   | 1964<br>(昭和39)<br>年 | 再興第49回院展     | アーツ前橋           | 画像    | 10巻68頁<br>10巻353頁 |
| 47  | —                                                                                   | 早春   | 1965<br>(昭和40)<br>年 | 第20回日本美術院春季展 |                 | —     | —                 |
| 48  |    | 清節   | 1965<br>(昭和40)<br>年 | 再興第50回院展     | 後藤純男美術館         | 絵葉書   | 10巻382頁           |
| 49  |   | 緑の交錯 | 1966<br>(昭和41)<br>年 | 再興第51回院展     | アーツ前橋           | 画像    | 10巻70頁<br>10巻414頁 |
| 50  |  | 百合   | 1967<br>(昭和42)<br>年 | 第22回日本美術院春季展 |                 | 院展史   | 10巻504頁           |
| 51  |  | 春到   | 1967<br>(昭和42)<br>年 | 再興第52回院展     | 東京藝術大学<br>大学美術館 | 院展史   | 10巻68頁<br>10巻447頁 |
| 52  |  | 春瓶   | 1968<br>(昭和43)<br>年 | 第23回日本美術院春季展 | 個人蔵             | 画像    | 11巻482頁           |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名 | 出品年                 | 展覧会名         | 所蔵                   | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載      |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-----|---------------------|--------------|----------------------|-------|-------------------|
| 53  |    | 妙高  | 1968<br>(昭和43)<br>年 | 再興第53回院展     |                      | 院展史   | 11巻60頁<br>11巻300頁 |
| 54  |    | 花   | 1969<br>(昭和44)<br>年 | 第24回日本美術院春季展 |                      | 院展史   | 11巻492頁           |
| 55  |    | 好日  | 1969<br>(昭和44)<br>年 | 再興第54回院展     | アーツ前橋                | 画像    | 11巻60頁<br>11巻332頁 |
| 56  |   | 薔薇  | 1970<br>(昭和45)<br>年 | 第25回春の院展     |                      | 院展史   | 11巻501頁           |
| 57  |  | 孫   | 1970<br>(昭和45)<br>年 | 再興第55回院展     | 個人蔵<br>(アーツ前橋<br>寄託) | 画像    | 11巻62頁<br>11巻362頁 |
| 58  |  | 離宮  | 1971<br>(昭和46)<br>年 | 第26回春の院展     |                      | 院展史   | 11巻512頁           |
| 59  |  | 埠頭  | 1971<br>(昭和46)<br>年 | 再興第56回院展     | 個人蔵<br>(アーツ前橋<br>寄託) | 画像    | 11巻63頁<br>11巻394頁 |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名         | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵                   | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載      |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------|---------------------|----------|----------------------|-------|-------------------|
| 60  |    | 花           | 1972<br>(昭和47)<br>年 | 第27回春の院展 |                      | 院展史   | 11巻524頁           |
| 61  |    | 少女とあ<br>ぢさい | 1972<br>(昭和47)<br>年 | 再興第57回院展 | 個人蔵<br>(アーツ前橋<br>寄託) | 画像    | 11巻64頁<br>11巻427頁 |
| 62  |   | 春瓶          | 1973<br>(昭和48)<br>年 | 第28回春の院展 |                      | 院展史   | 11巻539頁           |
| 63  |  | 田沢湖         | 1973<br>(昭和48)<br>年 | 再興第58回院展 |                      | 院展史   | 11巻458頁           |
| 64  | —                                                                                   | 春瓶          | 1974<br>(昭和49)<br>年 | 第29回春の院展 |                      | —     | —                 |
| 65  |  | 浅間          | 1974<br>(昭和49)<br>年 | 再興第59回院展 | 佐久市立近<br>代美術館        | 画像    | 12巻49頁<br>12巻360頁 |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名         | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵            | 画像の出典       | 院展史の<br>画像掲載      |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------|---------------------|----------|---------------|-------------|-------------------|
| 66  | —                                                                                   | 白い花         | 1975<br>(昭和50)<br>年 | 第30回春の院展 |               | —           | —                 |
| 67  |    | 六月の頃        | 1975<br>(昭和50)<br>年 | 再興第60回院展 |               | 個人蔵の絵<br>葉書 | 12巻399頁           |
| 68  | —                                                                                   | 白い花         | 1976<br>(昭和51)<br>年 | 第31回春の院展 |               | —           | —                 |
| 69  |  | 浅間 (B)      | 1976<br>(昭和51)<br>年 | 再興第61回院展 |               | 院展史         | 12巻50頁<br>12巻456頁 |
| 70  | —                                                                                   | アンセリ<br>ューム | 1977<br>(昭和52)<br>年 | 第32回春の院展 |               | —           | —                 |
| 71  |  | 浅間山         | 1977<br>(昭和52)<br>年 | 再興第62回院展 | 東京国立近<br>代美術館 | 院展史         | 12巻52頁<br>12巻505頁 |
| 72  |  | 武蔵野         | 1978<br>(昭和53)<br>年 | 第33回春の院展 | 個人蔵           | 画像          | 12巻703頁           |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名         | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵    | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載      |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------|---------------------|----------|-------|-------|-------------------|
| 73  |    | 高原          | 1978<br>(昭和53)<br>年 | 再興第63回院展 | 個人蔵   | 画像    | 12巻51頁<br>12巻554頁 |
| 74  |    | 春瓶          | 1979<br>(昭和54)<br>年 | 第34回春の院展 | 個人蔵   | 画像    | 12巻715頁           |
| 75  |   | 浅間高原        | 1979<br>(昭和54)<br>年 | 再興第64回院展 | 個人蔵   | 画像    | 12巻53頁<br>12巻603頁 |
| 76  |  | 花           | 1980<br>(昭和55)<br>年 | 第35回春の院展 |       | 院展史   | 13巻647頁           |
| 77  |  | 浅間高原<br>(5) | 1980<br>(昭和55)<br>年 | 再興第65回院展 | アーツ前橋 | 画像    | 13巻27頁<br>13巻332頁 |
| 78  |  | 浅間高原<br>(6) | 1981<br>(昭和56)<br>年 | 再興第66回院展 | アーツ前橋 | 画像    | 13巻28頁<br>13巻385頁 |

| No. | 作品画像                                                                                | 作品名  | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵                   | 画像の出典 | 院展史の<br>画像掲載      |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|------|---------------------|----------|----------------------|-------|-------------------|
| 79  |    | 白い花  | 1983<br>(昭和58)<br>年 | 第38回春の院展 | 個人蔵                  | 画像    | 13巻684頁           |
| 80  |    | 離宮歴日 | 1983<br>(昭和58)<br>年 | 再興第68回院展 | 埼玉県立近代美術館            | 院展史   | 13巻29頁<br>13巻489頁 |
| 81  |   | 春来る  | 1984<br>(昭和59)<br>年 | 再興第69回院展 | 個人蔵<br>(アーツ前橋<br>寄託) | 画像    | 13巻30頁<br>13巻542頁 |
| 82  |  | 花と蝶  | 1985<br>(昭和60)<br>年 | 第40回春の院展 | 個人蔵                  | 画像    | 13巻712頁           |
| 83  |  | 武蔵野  | 1985<br>(昭和60)<br>年 | 再興第70回院展 | 個人蔵<br>(アーツ前橋<br>寄託) | 画像    | 13巻31頁<br>13巻596頁 |

| No. | 作品画像                                                                              | 作品名 | 出品年                 | 展覧会名     | 所蔵 | 画像の出典                | 院展史の<br>画像掲載 |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----|---------------------|----------|----|----------------------|--------------|
| 84  |  | 朝映  | 1986<br>(昭和61)<br>年 | 第41回春の院展 |    | 第41回<br>春の院展<br>全作品集 | 14巻606頁      |

# 煥乎堂と煥乎堂ギャラリーの歴史

染 谷 滋

## 1. はじめに

前橋市本町に本店を持つ株式会社煥乎堂は、明治初年から書店を営む業界の老舗である。この書店に併設していたギャラリーは、そこを経営していた岡田芳保の手腕と共に、長い間群馬県の美術文化の育成と発展に寄与し、忘れることの出来ない大きな存在であった。とりわけ前橋市にとって、アーツ前橋の誕生以前にはきちんとした美術館がなく、煥乎堂ギャラリーは美術の薫りをかぐことの出来る貴重な場所であり続けた。2005年にやむを得ない事情でギャラリーが閉鎖される際には、「地域文化の発信に幕」という記事が新聞紙面に見られたが<sup>(1)</sup>、その閉鎖を惜しむ声は大きかった。

それだけ重要な文化施設であった煥乎堂ギャラリーではあるが、その活動の記録となるとほとんど残されていない。2007年4月8日に第6回あすなろ忌<sup>(2)</sup>の一環として、高崎哲学堂<sup>(3)</sup>で岡田芳保が関口将夫を聞き手として語った「煥乎堂ギャラリーを語る」という対談が、おそらく煥乎堂ギャラリーをテーマとして話された唯一の機会ではなかったかと思われる。このときの記録は、あすなろ忌発起人会の藤井浩が編集する『あすなろ忌』という8頁の手刷りの小冊子vol. 6（2008年4月13日発行）に簡単にまとめられてはいるが、対談の当日に配布されたvol. 5（2007年4月8日発行）に、「煥乎堂文化の担い手たち」と題された岡田芳保へのインタビュー記事があり、こちらの方が貴重な資料と言えるだろう。

このほど、2016年度と2017年度のほぼ2年間にわたって、煥乎堂の文化活動に関する資料調査を行ってきた。これは、アーツ前橋の開館以前から関わってきた「前橋文化年表」作成に関する調査の一環で<sup>(4)</sup>、既に2013年10月のアーツ前橋開館記念展のカタログ「カゼイロノハナ 未来への対話」に、その成果の一部として「前橋美術文化年表」を掲載しているが、煥乎堂ギャラリーの記録については十分とは言えないものであった。

2年間にわたる調査は、この不足部分を補うものであると同時に、あらためて煥乎堂ギャラリーの意

味を問い直すものであった。実際のところまだ調査は十分とは言えず、完全なものとはなっていないが、中間報告をまとめる必要はあると考える。従って本稿に掲載する事柄は、追加訂正が成される可能性があるが、調査研究とはそもそもそういう性格を帯びていることは言うまでもない。むしろ、本稿が公開されることで、記載されていない事柄や事実が新たに見出され、記載した推論の誤りなどが指摘されることこそ望ましいと言えるだろう。

## 2. 煥乎堂の歴史

煥乎堂ギャラリーの記録はほとんど残されていないと書いたが、煥乎堂そのものの歴史は様々に記録されている。最も基本的な文献としては、尾崎秀樹と宗武朝子の編集になる『日本の書店百年』（育英舎、1991年）に掲載されたインタビュー構成の「煥乎堂」と、2010年から11年にかけて『週刊読書人』に矢来神三が連載した「活字シアター」367話から425話、「上州文化の育成に貢献した書店『煥乎堂』の巻」全59回が挙げられるだろう。とりわけ後者は、明治の草創期から始まって、高橋家から小林家へと経営が移った2005年までの煥乎堂の歩みを丹念に追い、個性的だった経営者の人柄にまで迫った力作で、これを読めば十分過ぎる内容である。それでも、ギャラリーの歴史についてはほとんど記載がなく、連載を終えた後の426話で、展覧会などの文化イベントが盛んだったことを追記するに留まっている<sup>(5)</sup>。ここでは、これらの著作から要約して、煥乎堂の歴史をまとめてみたい。

『日本の書店百年』に付された年表によると、煥乎堂は1880（明治13）年の創業となっているが、これは高橋常蔵（1854～1917、fig.1）が高崎中紺屋町4番地に開業した年であり、併せて高崎田町と前橋本町にも分店を設けたようだ。もともと高橋家は慶長年間（1596～1615）から高崎中紺屋町に住み、呉服物や古着等を商っていたらしい。常蔵は初代武平から数えて7代目にあたるのだが、高崎に書店を開業するより早く、叔父の高橋曙（1835～1890）が



fig.1

ホームページを開くと、「明治初年創業」という表記になっている。

重要な点は、煥乎堂は書店であるよりもむしろ出版業としてスタートした事だろう。明治期には、教科書、字典、地図、習字教材、市町村一覧、郷土歴史、謡曲本、義太夫本などを盛んに出版している。

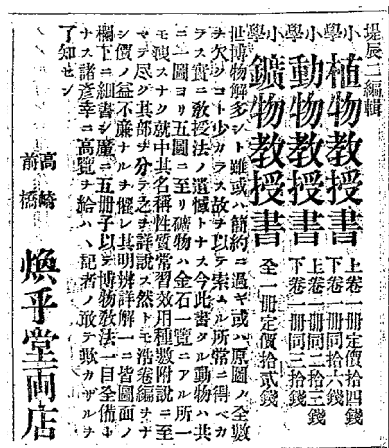


fig.2

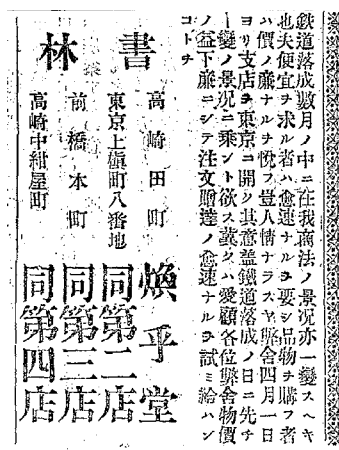


fig.3

1875年に東京に出て書籍出版の仕事をはじめた。この高橋晤を煥乎堂の創業者と考える見方もある。しかも、1872、3年には既に煥乎堂の出版物があったらしく、実際の創業がいつだったのかは良く分からない。

現在、煥乎堂の

上野新聞1883年3月13日付4面 (fig.2) に掲載されている広告も教科書である。

1881年、群馬県庁が高崎から前橋に移された。県庁をどこに置くかで高崎と前橋の間に争いが

あったことはよく知られている。鋭い商業感覚を持っていた常蔵は、1883年本店を前橋に移した。本町115番地となっているが、現在の国道50号線沿いで前橋プラザ元気21の向かい側のあたりだったようだ。上野新聞1883年4月14日付4面

(fig.3)に載った広告では煥乎堂の4つの店が記されているが、この時点では本店が高崎田町店、第2店が東京、第3店が前橋本町で、高崎中紺屋町は第4店となっている。この広告によると東京に支店を開いたのは4月1日からで、それは上野からの鉄道が高崎まで完成するのを見越してのことだと明言している。上野・高崎間の鉄道が開通するのは翌年の6月25日であるから何とも手回しがいい。

どういう事情か不明だが、前橋本店は短期間に場所を2度変えている。1887年6月に本町から連雀町8番地へ、さらに翌年の7月には曲輪町2番地へと移転した。連雀町は現在の前橋八幡宮周辺からえ



fig.4

びす通りにかけての場所で先の本町のすぐとなりだ。曲輪町2番地は現在の本町1-3-4にあたり、煥乎堂現店舗の道路を挟んだ向かい側の地である。

この頃の写真と思われるものが残っている (fig.4)。立派な

蔵を備えた店で、手前の時計屋の看板に「曲輪町」とあるから88年以降のものであろうが、矢来神三はこれを「明治26~27年頃」として紹介している<sup>(6)</sup>。この写真をよく見ると、店の前に出した行灯型の看板には「本、煥乎堂高橋店」と記され「学校用図書類」と読める文字も記されている。

高崎田町の煥乎堂は、高橋常蔵の義弟にあたる吉田鉄三郎が経営していたため「吉田煥乎堂」と呼び、前橋店を「高橋煥乎堂」と呼んでいた時代があったらしく、この写真からその事実が確認できる。

学校用図書すなわち教科書類の販売は、早くから煥乎堂の売り物だったようで、煥乎堂が長い歴史を生き抜いたのは、実はこの教科書販売を握っていたからだった。

ところで煥乎堂という名前の由来について説明しておこう。これは『論語』の以下の文章から取られている。

「子曰、大哉、堯之為君也、巍巍乎唯天為大、唯

堯則之、蕩蕩乎民無能名焉、巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章」(泰伯第8の19)。

書き下し文にすると「子曰く、大なるかな、堯の君たるや。巍巍として唯天を大なりと為し、唯堯のみこれに則る。蕩々として民能く名づくること無し。巍巍として其れ成功有り。煥として其れ文章あり」となり、中国古代の神話的な聖人君主である堯を讃える文章の文末に登場する「煥乎其有文章」に依っている。「煥乎」は光り輝くさま、「文章」は制度や文化を意味し、堯の治世が素晴らしいことを述べている。

この言葉を選んだのは高橋曄だったようで、書物を連想する「文章」と言う言葉が出版を行う者には気に入ったのではないだろうか。煥乎堂の輝かしい未来の成功と共に、書籍によって文化を築こうという意気込みが伝わる名称である。

その高橋曄の死去により1890年には東京店が閉鎖。高崎店も1912年には閉じているが、常蔵は1907年に宇都宮市鉄砲町に出店し、長女の婿に経営を任せている。明治時代に煥乎堂の土台を築いた常蔵は、教科書を扱うと同時に教材としての楽器等の販売も手掛けた。早くも明治30年代には、前橋女学校にオルガンを売った記録が残っている。曲輪町2番地に隣接して土地を購入、そこに楽器部を新設した。現在でも楽器販売や音楽教室に熱心に取り組む煥乎堂の基本姿勢が読み取れる。

上毛新聞1913年12月25日付3面に当時の煥乎堂の様子を描写した文章が掲載されている。「社会解剖」と題されたシリーズで、主に前橋で話題となっている人物や出来事に関して書かれ、この年の9月3日から始まり12月29日までに80回続いた。この78回目に取り上げられたのが読書界で、煥乎堂書店と図書館が記事になっている。著者はこの年の6月から上毛新聞社に籍を置いた文筆家の坂梨春水(1889～1977)と思われ<sup>7)</sup>、なかなかの名文である。冒頭の一部だけ引用しておこう。

「早や新春は此の屋に訪れて、入口の書台には景気のいい新年の雑誌や懷中日記やカレンダー等山の如くにうず高く、奥まった壁にズラリ背皮の金字燦然と眩しく、店を右往左往する小僧中僧の足取りもせわし。店頭に集るはゲートル履きの中学生、海老茶の袴、銀縁眼鏡の官員、奥様、令嬢等にして、商家の小僧など余り見えず。時節柄、三年度懷中日記、新年号少年少女雑誌、婦人雑誌等最も呼び声高し。」

(現代仮名遣いに改め、適宜、句読点やカギ括弧を加えた。以下、引用は同じ。)

この後、具体的に売れている本の紹介が続くのだが、明治時代には平置き of 書台が大半だった本屋の店頭も、背表紙の立派な書籍が並んだ壁の棚が登場していることが分かる。

1917年、高橋常蔵が没した。後を継いだのは長男の清七(1884



fig.5

～1942、fig.5)である。明治期の商家の典型ではあろうが、清七は小学校を卒業すると東京に奉公に出され学校には行けなかった。にもかかわらず独学で和、漢、洋の書物を読み、英語、

仏語、ギリシャ語、ラテン語など7カ国語に精通していたという。清七がスピノザの研究者として名高いのはよく知られている。清七が集めたスピノザ関係書籍は、清七の没後、群馬大学に寄贈されて今でもスピノザ文庫として全国の研究者の注目を集めている。学者肌の清七が集めた書籍は膨大で、スピノザ関係以外の蔵書7,621冊は、県立図書館に寄贈されて「高橋文庫」として見る事が出来る。

経営者としての清七の業績も大きい。大正から昭和の戦前期を牽引した清七は、経営の近代化をもたらし、1921年2月15日、資本金100万円を計上して株式会社に生まれ変わらせた。清七の経営姿勢の中で目を引くのは、1937年に作成した「新煥乎堂様式綱領」だろう。煥乎堂のあるべき姿を示したもので、「商業は道徳でなければならぬ」という書き出しに始まり、責任、秩序、自由などの文言が強く語られている。矢来神三は背景にスピノザの思想があると指摘する。

清七の時代、1930年に磯貝憲佑(1906～1979)が入社した。戦後の煥乎堂経営の中心となる人物である。甘楽郡妙義町の出身で波瀾万丈の青年期を送り、一時は社会運動に身を投じて転向するなどしていたが、煥乎堂で働いていた清七の弟・高橋元吉(1893～1965)と知り合い、元吉に気に入られて煥乎堂

に入社したのだった。

『日本の書店百年』に掲載された「煥乎堂」の章は、この磯貝のインタビューを中心に書かれたものだが<sup>(8)</sup>、煥乎堂入社時の思い出として次のように語っている。「(店は) 5、60人の規模でした。蔵を店に直したり、間口5間ぐらいありましたよ、奥行は12、3間ですね。あの時分としては大きな店です。売場面積は60坪ぐらいありました。」これに続いて同席した参事の大塚隆三が、「まるまる5間は売場で使ってなかったけれど、蔵の所をウインドーにして…。楽器の方をわけて、楽器の裏が帳場だった。昭和3、4年頃からですから、レコードもありました」



fig.6

自転車が並ぶ右奥に以前にはなかったショーウィンドーらしきものが確認できるし、2階にはベランダが設けられている。

磯貝の思い出によると、他の商店では厚司に前垂れという服装が一般的だったが、煥乎堂の店員は洋服でレコード販売以外は全員男性だったらしい。

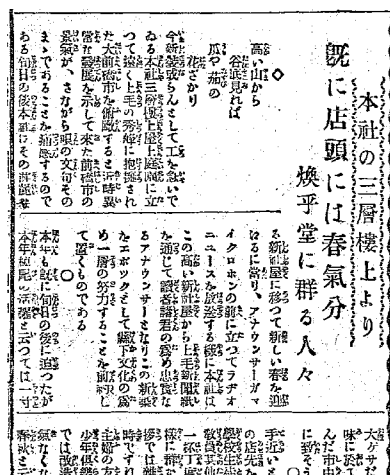


fig.7

と言っている。

これを裏付ける写真が残っていて (fig.6)、先に紹介した写真と同じアングルで撮影されているものだが、大正10年度の日記類の大売り出しの看板があるところから1921年正月頃の風景と思われる。自転車

分／煥乎堂に群る人々」という見出しがある。上毛新聞社は丁度この時期新社屋を建設中で、3階建ての屋上からの眺めが新鮮だったのだろう。屋上から目に止まった煥乎堂を描写するといいいながら、内容は店を訪ねて店員に取材した内容になっている。当時の煥乎堂の雰囲気や大正末期の出版界の様子分かるので、一部を引用しておく。

「手近いところで先ず煥乎堂書店の店先をのぞき込むと、男女中等学校生徒を始め小学校生徒、小学教員其の他いわゆる知識階級の人々が一杯、丁度砂糖玉に蟻がたかった様に群がっている。番頭さんの挨拶では、雑誌は今が一番かき入れ時ですね。婦人物では『婦女界』『主婦の友』が一番です。子供物は『少年倶楽部』あたり。思想的なものでは『改造』。文藝物はカラッカリ元気なくなって『不同調』とか又『文藝春秋』と云った様な断片的なつまらないものが少々売れるだけです。単行本では『工場』とか『女工哀史』と云った如き労働問題を取り扱ったもので、これは世相の一端が知れます。娯楽物では『キング』。

楽器部では盛んにレコードをかけて、もっともらしい顔をして新しがっているお客のごきげんを取っているが、主任の東宮君の話に依ると、不景気を喰らっているので楽器の如く金高の嵩むものは駄目ですが、レコードは相当はけます。それにビクターが二割方安くなったので……やはり売れるのはヴィオリン、オーケストラボーカル、ダンスレコードの類で、童謡なども売れます。」

ここに出てくる楽器部は、前にも記したように常



fig.8

蔵の時代からあったものだが、1937年と思われる楽器部店頭での集合写真が残っている (fig.8)。正月の記念写真だろうか、60人ほどの大所帯で、戦前の煥乎堂の賑わいを窺わせてくれる。よく見ると、高橋



fig.9

清七や元吉、磯貝憲佑と思われる人物も確認できる。

その磯貝は10年勤めて1940年に一旦退社している。社長の高橋清七と意見が合わなかったからだとも言われているが、皮肉なことに2年後の1942年5月3日に清七は急逝した。58歳だった。

後を継いだのは弟の元吉だった (fig.9)。

高橋元吉といえば詩人としての存在の方が際立っているの、経営者としての元吉像は次第に薄れてゆく宿命なのだろうが、1963年に長男・徹に社長を譲って会長に退くまでの21年間は、まぎれもなく経営者であったし、それ以前の30年間も煥乎堂に勤務して、父の常蔵と兄の清七を支えていたので、煥乎堂と元吉とは切り離せない。元吉についての著作は多く、今さら門外漢の私が付け加えることは何もないが、戦争末期から戦後の再建という最も困難な時期を、煥乎堂の社長として重責を負ったこの詩人の魂を思うと、頭の下がる思いがする。兄の清七が亡くなって8日後には、友人の萩原朔太郎が55歳で没している。経営と詩作の両面で、大きな導き手だった二人の相次ぐ死は、どれほど大きな喪失感を元吉に与えたことだろうか。しかもその喪失感はまだ終わらなかった。

元吉が煥乎堂の経営を引継いで3年後の1945年8月5日の夜、92機のB29の来襲で前橋市内は焼



fig.10

き尽くされた。煥乎堂も倉庫二つを残したのみで、社屋はすべて灰燼に帰した<sup>(9)</sup>。その当時の様子を示す写真も残っている (fig.10)。焼け跡の中にも残った建物が所々にある。中央を通る道が国道50号線で、手前の瓦礫が煥乎堂跡。右に見える倉庫が焼け残ったものだろう。遠くに麻屋デパートも見える。戦後の煥乎堂は、この焼け跡に戸板を並べて営業を再開するところから始まる。

この危機的な時代に、再び元吉の要請を受けて煥乎堂に戻ってきたのが磯貝だった。磯貝の復帰は1952年3月である<sup>(10)</sup>。磯貝が最初に手掛けたのが新社屋の建設だった。磯貝は「本丸確立論」というのを唱えて本社充実こそ将来の発展を約束すると訴えた。元吉が「金があれば店は建つか」と聞くと、「金があっても建ちません。度胸がなければ出来ません」と磯貝は答えた。周囲からは10年早いと言われたが、



fig.11

磯貝が個人で保証人となって建築資金を調達、店舗は1953年11月に着工、翌年9月に完成した (fig.11)。

北に面した間口10メートル、奥行き東側13メートル、西側18メートルの

2階建てで、その2階にも広い売場が続いた。当時は本屋で2階に客を上げるのは大変な冒険だったようだ。しかも、設計は当時既に注目されていた建築家・白井晟一<sup>(11)</sup>に頼んだ。元吉は12歳年下の白井と肝胆相照らし、毎晩のように岡源<sup>(12)</sup>で食事を共にしたようだ。新店舗は店の中央に印象的な円形の吹き抜けが開口し、そこにらせん階段があった (fig.12)。



fig.12

店の入口にはラテン語で「QVOD PETIS HIC EST MCMLIV LIBRARIVS KANKODO」（あなたの求めるものはここにある 1954書店煥乎堂）と記されていた。

磯貝の判断は正しかった。煥乎堂の経営は順調に軌道に乗り、7年後の1960年には早くも3階を増築するまでになっている。この増築された3階が、ギャラリーとして積極的に活用されるようになるのだが、それは次章で述べたい。

煥乎堂と白井晟一との出会いは、もうひとつ別の出会いをもたらす。磯貝の一人娘・京子に、白井は東京で知っていた小林二郎という男性を紹介し、白井が仲人となって新店舗が開店した同じ年に二人は結婚するのだが、今度は元吉がその小林を煥乎堂に入社させようとして働きかけたのだ。小林は空調関係の仕事を東京でして、書店とは無縁の人物だったし、義父となった磯貝も「2代続けて番頭をやることもない」と言って反対したらしい。しかし、白井が見込んだ青年に元吉は全幅の信頼を置いていた。



fig.13



fig.14

将来、息子・徹の右腕となってくれる人物を探していたのだ。

小林は元吉の説得に煥乎堂入社を決意する。1959年4月、小林二郎が営業課長とし就任。磯貝の仕込みもあって小林はたちまち書店の経営に精通する。戦後の煥乎堂は高橋元吉から徹(1921~2005、fig.13)にバトンタッチされたが、実質的な経営の責任者は磯貝憲佑(fig.14)とその娘婿の小林二郎だった。

元吉は1963年に社長の座を徹に譲り、自らは会長に

退いて鵠沼の地に隠棲する。その2年後、71歳でこの世を去った。同じ年、小林二郎は早くも取締役就任、徹の右腕として煥乎堂を支えた。元吉の思い描いた姿でもあった。即断即決で「磯貝天皇」とまで称された磯貝憲佑も、1979年にこの世を去った。戒名は「憲章院煥禅乎侃居士」と付けられた。「煥乎」の文字が使われているのは、煥乎堂に人生を捧げた磯貝に相応しいものだったろう。

磯貝が作った「煥浩会」という会がある。これは、煥乎堂が取引している出版社や取次店の担当者を温泉などに招待して接待するもので、年1回開かれていた。出版社が書店を接待するのが普通で、その逆のケースは珍しいのだそうだ。煥乎堂が中央の出版業界でも一目置かれた存在だったことは、この事でも良く分かる。

磯貝が亡くなる少し前の1976年、250名が収容で



fig.15

きる音楽センターが建設された(fig.15)。音楽に力を入れる煥乎堂の姿勢の象徴でもある。白井晟一設計の本店と国道50号線を挟んで向かい合うような位置で、少し年配の前橋市民にとっては、この二つの煥乎堂の建物は懐かしい風景だった。

現在の店舗はこの音楽センターの位置に1993年に建てられた。既に四半世紀が過ぎ、今ではすっかり新店舗が前橋の街の風景になっている。

### 3. ギャラリーの歴史

既に述べたように煥乎堂ギャラリーの歴史は、煥乎堂についての記述の中にはあまり触れられていない。2年に及んだ調査でも見つかった資料は乏しく、案内状などの実物で確認できたものは1970年代の後半になってからのものが大半だった。関係者によって記録された資料としては、1981年12月に入社して煥乎堂ギャラリーの経営を補助した、武藤貴

代によって作られたリストが唯一といってよいものだ。これは、会期と展覧会名だけが記されたもので、2001年までの約20年間分が記されているが、全てが記録されているわけではなく、最初の頃は空欄も多い。それでも、最盛期のギャラリーの活発な活動状況は十分に見て取れる貴重な資料となっている。

これから述べるギャラリーの歴史は、このリストをはじめとして、ギャラリーの経営とは切り離せない岡田芳保の手元に残った資料や、県立近代美術館などの関係機関及び作家などが保管する案内状、そして何よりも貴重な情報源となった新聞記事によって確認できた事柄によっている。

さて、明治初期からの長い歴史を持つ煥乎堂が、いつ頃から絵画などの美術展示を行うようになったのかは、現時点では断定することは難しい。楽器などを早くから取り扱っていた煥乎堂は、文房具や画材なども取り扱った可能性はある。例えば、1927年から10年間毎年開催された上毛新聞社主催の上毛美術展<sup>13</sup>は、県内で最初の大々的な公募展で、これに協賛して前橋を中心とした各商店が様々な景品を寄付しているのだが、1931年の第5回展への煥乎堂の景品は「石膏ヴィナス、同立てる裸女、白樺細工柱掛、同筆立」という商品である（fig.16）。石膏のヴィーナス像や裸婦像が画材だとは断定できないが、美術書は扱っていただろうから、画材への関心も、実作品への興味もあったに違いない。

この時期の社長は高橋清七だが、1932年1月8日付東京日々新聞群馬版に面白い記事が載っている。

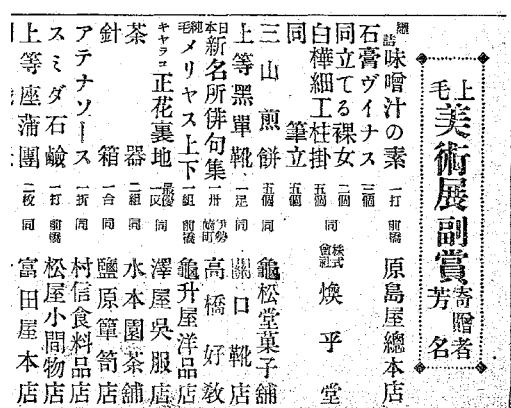


fig.16

県内著名人の趣味を取り上げたシリーズの3回目に清七が選ばれ、新聞の挿絵を収集する趣味を披露しているのだ。6、7年前からの趣味で、切り抜いた挿絵が3万枚以上に達したと記されている。石井鶴三の挿絵が特にお気に入り、他にも中村岳陵や小

村雪岱の名が挙がっている。通常の絵画では見られない画題が溢れている挿絵の面白さを語っている部分はなかなか面白い<sup>(4)</sup>。清七がスピノザや語学のエキスパートだけではなく、美術に対しても一家言あった事が窺える。そんな清七だからこそ、店の壁に絵を飾るだけでなく、作家の個展に空きスペースを提供することは十分考えられることだった。

現在までの調査で確認できた煥乎堂での美術展示の最初の実例は、1938年8月3日から5日までの3日間行われた「塚本茂滞欧作品展」である<sup>(15)</sup>。

塚本は1937年にパリで行われた国際美術教育連盟主催の万国美術教育会議に、日本を代表して参加。この煥乎堂での滞欧作品展は、そのときの制作になるもので、たまたま群馬県図画教育会が開催した講習会に、講師として招かれた機会に併せての個展開催となったようだ。この展示の開催を伝えている上毛新聞7月28日付2面の記事には、「煥乎堂書店楼上」としか書かれていないので、何点くらい並んだのかは分からない。とは言え、1階の店内ではなく2階で開かれたことが「楼上」という言葉から推測できる。

この展示の1ヶ月後、9月10日から13日までの4日間、今度は「住谷磐根個展」が開催されている<sup>(16)</sup>。これも上毛新聞8月22日付2面の記事で確認できたことだが、従軍画家として戦地に趣いていた住谷の中国大陆での戦線スケッチが中心で、出品は「油絵、水彩画、墨絵等百余点に上る筈」となっている。この記事では会場は「煥乎堂書店ホール」と記載されている。「百余点」という予告は同紙9月8日付夕刊2面では41点に変更され、具体的な作品名も記されている。さらに注目すべきは9月11日付2面の記事 (fig.17) で、会場写真が掲載されていることだ。

この写真を見ると、確かにホールと呼んでもよい  
広い空間が見て取れるし、書店とは別の場所である  
ことは間違いない。別の記事で、煥平堂を会場に頼



fig.17

繁に会議を開催していることも分かっており、会議室にも展示室にも出来る場所がその当時の煥乎堂内にあったのだろう。

上毛新聞9月15日付1面には「戦線スケッチ展終わる」という記事も掲載されており、会期中本展を主催した海軍協会県支部や、当時の土屋知事なども作品を買い上げたことが報告されている。1人の作家の個展を4回にわたって記事にするのは珍しいことだが、これは戦時体制が強まってきた当時の状況を反映したもので、上毛新聞社も後援している展覧会だった事が影響したのだろう。そのおかげで、貴重な会場写真までも見る事が出来たわけだ。

この1938年には、上毛新聞紙上にもうひとつ煥乎堂を会場とした展覧会の記事が載っている。12月

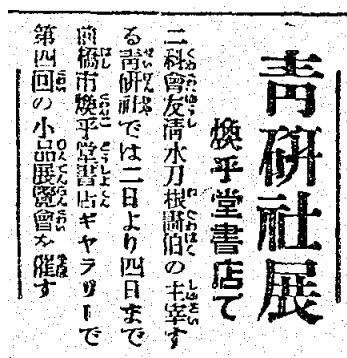


fig.18

2日付2面 (fig.18) に見出しを入れても6行しかない短い記事なのだが、初めて「煥乎堂書店ギャラリー」という呼び名が使われている点は重要だ。前橋市内で青研社という画塾を主宰していた清水刀

根<sup>7)</sup>の記事で、青研社の第4回小品展覧会を2日から4日まで開催するという内容だ。

青研社はそれまで群馬会館や前橋商工会議所などを会場として展覧会を開催しており、煥乎堂での展示はこれが最初だと思われる。

この年以後、煥乎堂を会場とした展覧会は、頻繁とは言えないまでもときどき新聞紙面に現われることになる。塚本茂の個展が開かれた1938年8月頃に、煥乎堂の経営方針に何らかの新しい要素が加わった可能性は否定できないが、何分にも資料が乏しく判断できない。

この時代、1931年9月18日に満州事変が起り、太平洋戦争の終結までを「十五年戦争」と呼ぶこともあるように、年と共に戦争への緊張感が高まり、1937年7月7日からの日中戦争開始後は、非常時という意識が国民に行き渡っていた。その一方で、上毛美術展に見られるように、県内での美術に対する興味関心は、これまでにない盛り上がりを見せてもいた。本来ならば東京で活躍していただろう二科会の新鋭作家、清水刀根が家庭の事情で帰郷し、前

橋に画塾を開いたのもタイムリーだったと言える。

1941年9月16日、目黒雅叙園で群馬美術協会<sup>8)</sup>が結成されると、中央で活躍していた一流作家たちが県内でも盛んに展覧会を開くようになるのも、芸術報国を合い言葉とした時代背景抜きには考えられない。県内画壇というようにものが醸成されるのはこの時期だとも言える。煥乎堂が美術展を盛んに行うようになるのも、時代の要請だった。

とは言え、戦後の混乱期には煥乎堂での美術展も中断したようだ。煥乎堂での展覧会が再び記録に登場するのは、1951年1月20日から3日間開かれた創元会群馬支部展である<sup>9)</sup>。この展覧会をみた美術批評家の庭山政次が記事を書いている中に、次のような箇所がある<sup>10)</sup>。「赤城をまともに見はるかす会場、煥乎堂の二階の窓硝子を北風が烈しく鳴らしている。荒涼たる外景から目を転じて、室内約三十点ばかりの作品を眺める思いは救われたようにあたたかい」。

市内の被災戸数が55%に及んだ前橋空襲から、まだ5年余りしか経っていない時期の市内の様子が、強い北風と「荒涼たる外景」という言葉に良く表わされてる一文なのだが、気になるのは、このときの煥乎堂の建物はどこにどう建っていたのかという点だ。煥乎堂は既に記したように前橋空襲で焼失したのだが、白井晟一設計の新店舗が完成したのは1954年である。終戦直後の10年近い年月の記録は乏しいのだが、高橋元吉の文章と思われる次のような一文がある。「教科書を買っていた処、あの外廓だけが残ったので、屋根をつけ、二階をつけて、下を売場に、二階を事務所に使っている」<sup>11)</sup>。これは国道北側の地所で、のちに音楽センターが建てられる現店舗の場所だと考えられるのだが、どのような建物でいつまで使っていたのかよく分かっていない。

この年にはもうひとつ煥乎堂での展覧会の記録が見つかる。9月15日と16日の二日間開催された近忠漫画個展だ<sup>12)</sup>。上毛新聞9月26日付4面に日本画家・遠藤燦可の批評が載っていて、「出陳点数は十八点で、煥乎堂ギャラリーの壁面には適しいものであった」と記されているから、漫画のようなそれほど大きいとは思えない作品が20点近くで丁度良いスペースだったのだろう。

一枚の写真が残っている (fig.19)。赤城山を背景にして前橋の街並みが写されたものだ。山には雪が残り、よく見ると家の屋根にも雪が残っている。正



fig.19

面に「KANKODO」と書かれた建物が目立っている。間違いなく煥乎堂で、その背後には片原饅頭の煙突が立っている。煥乎堂の前にバスが走っているが、この道が国道50号線である。写真は元電電公社社員の島田幸一が撮影したもので、1950年頃のものと説明されているのだが、年代に大きな間違いがないのなら<sup>23)</sup>、戦後の10年近くの間ギャラリーとして使われたのは、この建物の2階だったに違いない。

確認できたこの頃の煥乎堂での展覧会を列挙しておこう。

1952年6月15日「詩と絵画の青猫展」

1952年11月29日～30日「群馬造型美術サークル展」

1953年2月20日～25日「深谷徹洋画展」

1953年7月10日～12日「島岡実第1回スケッチ展」

1953年11月15日～17日「群馬二紀展」(麻屋デパートと2会場使用)

1953年11月18日～20日「赤塚忠一水彩画第2回個展」

1954年7月?日～10日「島岡実第2回個展」

1954年12月3日～5日「新造形展」

1955年2月5日～7日「塚本茂個展」

1955年3月?日～14日「川隅路之助個展」

1955年3月29日～31日「新造形展」(4月4～6日 高崎・珍竹林画廊に巡回)

1955年4月15日～18日「第2回遠藤燦可水墨画個展」

1955年5月21日～23日「第12回青研社洋画展覧会」

1955年10月1日～2日「前橋市高等学校美術部連盟第1回絵画展」

1955年10月28日～30日「群馬二紀展」

個々の展覧会の内容には踏み込まないが、ここに記載した展覧会は、実際に行われたもののごく一部であることは断っておきたい。何度も記すように、

まだ調査途中の報告であるから、分かっていることだけで判断すると、全体像を見誤る恐れがある。会場についての呼称は、「煥乎堂画廊」と書かれたり「煥乎堂ギャラリー」と呼ばれたり様々で、単に「煥乎堂書店」と書かれる場合も多い。

1954年9月には白井晟一の新店舗が完成した。この店舗でギャラリーが本格的になるのは、1960年に3階を増築してからのことだと思われるが、増築以前にも2階の空きスペースで展覧会を行っていたという証言もあり、ギャラリーの場所の移動についての詳細は分かっていない。上記の展覧会についても、途中から新店舗に移った可能性はある。例えば、最後に記した1955年10月の「群馬二紀展」は「県内入選者の作品が約50点陳列されている」<sup>24)</sup>と記事に書かれ、近忠の漫画展と同じ会場とは思えない。新店舗ができたことで、従来の店舗が事務所やギャラリーとして広く使えるようになった可能性も十分にある。国道北側の煥乎堂の地所に音楽センターが建設されたのは1976年であるが、1965年に煥乎堂に入社した岡田芳保は、その前の旧店舗(fig.19)を記憶していない。旧店舗は少なくとも1965年以前には取り壊されていたようだ。

煥乎堂ギャラリーの全盛期を支えた岡田芳保は、1937年3月15日に群馬郡国府村(現在の高崎市東国分町)の住谷一族に生まれた。住谷家は国府村の大地主で、一族からは日清・日露の戦争で非戦論を唱えたキリスト教徒の住谷天来、戦後長きにわたり同志社大学総長を務めた経済学者の住谷悦治、悦治の弟で前出した画家の住谷磐根など、多士済々の有能な人物を輩出している。岡田は群馬町立中央中学校(現在の高崎市立群馬中央中学校)時代から文学方面に明るく、勢多農林高校に在学中の頃には教師も太刀打ちできないほどの読書家だった。

高校卒業後、東京神田のアテネ・フランセに通ってフランス語を学び、神田の大型書店「書泉グランデ」にアルバイトで入るが、たちまち本採用となり係長へと抜擢される。周囲の人間誰もが認めるほど本を愛し知り抜いていたからだが、4年近い「書泉」時代に、東京の文士や書店関係者とも交流を持つようになった。

1965年11月、当時前橋市立図書館長だった渋谷国忠の仲介で煥乎堂に入社。この年の1月末には高橋元吉が亡くなっていて、小林二郎が取締役に就任している。磯貝憲佑が名実ともに「天皇」として君

臨していた時代だ。「書泉」での経験が買われて、係長として就任した岡田は、磯貝にも気に入られてトントン拍子で出世したようだ。

1968年に音楽センターが建設されると、店舗の3階にあった音楽教室が不要となり、岡田は改装を任されて広いギャラリーを作った。1979年5月10日が新装開店したギャラリーの初日だったが、展覧会は自由美術協会会員の井上長三郎の自選展だった。当時の案内状が現存していて「画廊改装記念」と名付けられている。

案内状は1970年前後から現物が確認できるようになるが、1974年までは「煥乎堂3階ホール」という表記が一般的で、1975年からは「煥乎堂3階画廊」という表記に変わる。全てを確認できているわけではないが、この頃に何か意識の変化があったのかも知れない。1974年10月には群馬県立近代美術館がオープンし、新聞紙面などでも美術に関する話題が増える。県内にある種の美術ブームのような状況が生まれていた可能性はある。ギャラリーの改装も、「画廊」と自ら名乗るような意識変化の一環だったかも知れない。

当時のギャラリーの様子を的確に伝える写真は



fig.20



fig.21

残っていないのだが、参考のために改装前と後との写真を提示しておこう。1976年12月の「積田鯉士展」(fig.20)と1991年5月の「八人の創造者展」(fig.21)だ。

改装前の「積田鯉士展」の会場写真では、展示パネルは明らかに仮設で、高さも天井までは届かない2m50cm程度の壁面だ。茶系統の2色で塗り分けられており、床の模様も黒と白の2色、少し目障りな円柱も黒く見える。それに対して「八人の創造者展」では、中途半端な高さの仮設壁は姿を消し、壁も柱も白く塗り替えられ、照明も天井に埋め込まれたものと着脱可能なスポット照明に変わっている。床もグレーのカーペットのように見え、全体的に会場が明るく広がっている印象だ。何よりも、煥乎堂ギャラリーのトレードマーク的なゆったりとした応接セットが置かれ、来客をもてなすための急須やポットも見えている。

実は、この応接セットこそは、煥乎堂のギャラリーをある種のサロンのような場所に変えた重要なアイテムだった。何人もがゆったりと座れることで、気楽に気兼ねなく腰を据えることが出来、多くの人が出会う場所でもあった。

岡田をはじめとしたギャラリーのスタッフは、来場者同士を紹介する労を厭わず、この場所は、作家と鑑賞者とが会って会話するだけでなく、鑑賞者同士の出会いの場所であり、井戸端会議的な雑多な情報交換の場所でもあった。美術館のような公共施設に欠けているのは、来場者が会話する場所の不足だろう。たとえ知り合いと出会っても、展示室内でお喋りするのは大抵御法度だ。しかし、作品の前で自由に意見交換することこそ本当は大事なのだ。それに比べると、煥乎堂ギャラリーはいつも賑やかだった。作家の一人や二人は常にソファに座っていて、大声で話す声が良く聞こえた。その会話を耳にしながら作品を見て回るのがなかなか面白いのだ。

話が逸れたが、この煥乎堂ギャラリーのスタイルは、1993年に現在の店舗が新築された際にも踏襲された。白井晟一設計の旧店舗は、増改築を繰り返しながら40年近くが過ぎていたので、耐震化の問題も含めて既に限界だった。まだ20年も経たない音楽センターを取り壊すのは少しもったいなかったが、音楽センターの敷地に新しい店舗を建て直すのが最良の選択だった。設計は前橋市内に拠点を持ち、県内で数多くの公共建築を手掛けている福島建築設計事務所に任せた。正面から見ると地上6階建ての



fig.22

店舗だが (fig.22)、実は奥の部分が一部7階建てになっている。ギャラリーは4階南側に置かれた<sup>49)</sup>。

この現社屋が完成する前年に、高橋徹は社長を退任し、長男の元理がその後を継いだ。岡田

芳保は1985年には取締役、1986年には本店店長にまで昇進していたが、社長の交代で常務取締役に就任している。

この新社屋の建設前後でも、ギャラリーの運営は切れ目無く続いている。試みに、1993年の1年間の展覧会を以下に書き出してみる。

- 1月2日～12日「第33回煥乎堂美術展」
- 1月14日～19日「第28回群馬県児童画作品展」
- 1月21日～26日「井田淳一 民家を描く」
- 1月28日～2月2日「高橋元吉遺墨展」
- 2月5日～9日「群馬県短歌作品展」
- 2月11日～21日「井田秋雄展」
- 2月23日～28日「鎌田悠紀子 秋桜会展」
- 3月5日～16日「第4回小暮真望展」
- 3月19日～30日「金子英彦1982-1991」
- 4月2日～13日「竹久夢二展」
- 4月17日～29日「狩野守油絵展」
- 5月1日～11日「第10回紗鶏会展」
- 5月13日～18日「高山英子・祐子 皮革工芸展」
- 5月21日～30日「斎藤清の世界展」
- 6月4日～14日「司修 絵本原画展『河原にできた中世の町』」
- 6月17日～29日「夏期煥乎堂創作美術展」
- 7月1日～6日「輪島塗逸品展」松尾昭典展」
- 7月9日～20日「坂本好一銅版画展」小暮真望新作『尾瀬を描く』」
- 7月23日～8月1日「島崎庸夫展」
- 8月3日～15日「第17回煥乎堂レアリズム展」
- 8月17日～24日「良寛展」

- 8月26日～31日「瑞溪硯展」
- 9月3日～15日「深谷徹遺作展」
- 9月18日～26日「東宮不二夫展」
- 9月28日～10月5日「ヴィジュアル詩展」清水和夫能面展」
- 10月7日～12日「長谷川郁子展」
- 10月14日～19日「第23回一元会展」
- 10月22日～31日「菊地敏之・田部井勤・高柴昌幸三人展」
- 11月2日～9日「川淵直樹作陶展」大野黙知竹芸展」
- 11月12日～21日「冬期煥乎堂創作展」
- 11月23日～30日「第29回自由美術群馬展」
- 12月11日～29日「司修 萩原朔太郎『郷土望景詩』幻想展」

以上、二本立ての展覧会もあり年間で36本を数える。月3本のペースだ。33回を数える煥乎堂美術展のように、毎年恒例展覧会となっているものも多く、余裕があれば個々の展覧会の中身に立ち入って述べたいが、それは別の機会にする。当然の事ながら、地元の作家の展覧会が多数を占めてはいるが、そうではないものも多く、「竹久夢二展」や「良寛展」のような著名物故作家の展覧会も含まれていてバランスが良い。上記最後の「司修 萩原朔太郎『郷土望景詩』幻想展」は、新社屋の新築オープン記念展である。

これまで触れなかったが、煥乎堂の文化事業はギャラリーでの展覧会事業だけではない。展覧会に併せた講演会などはもちろんだが、「文芸講座」と称する様々な分野の講演会は1977年から実施しているし、コンサートや映画上映まで行っている。その全貌を書き出すのは私一人の力では困難だ。煥乎堂が最も力を入れている「ヤマハ音楽教室」の活動に至っては、その出先機関は全県下に及んでいる。教科書販売と音楽教室とが煥乎堂を支えている二本柱と言っても過言ではないだろう。

#### 4. 煥乎堂ギャラリーの終焉

岡田芳保は、煥乎堂在職中ギャラリー経営では赤字を出さなかったと自信たっぷりに断言している。一つの展覧会で数百万、年間では売上高が億を超えたことも多いという。その真偽のほどはともかくも、作品を売ることに熱心だったことは間違いない。個展やグループ展などを通じて煥乎堂ギャラリーと

親密に付合ってきた画家の有村真鐵は、煥乎堂が他の画廊よりもはるかに多くの作品を売ってくれたことを証言している。作品を売るだけでなく、レセプションや宴会などの接待も手厚く、画家にとっては有り難い存在だった。それだけに、煥乎堂で扱ってもらえるかどうかは、作家の側には大きな関心事だったろう。

作品を売買と結びつけるのには抵抗を感じる向きもあるかもしれないが、作品を売ることによって生活が営むのが昔からの作家の生業だった。作品が流通することで作品の価値が生まれる側面は否定できない。その点から言えば、数多くの作品を売りさばいた煥乎堂は、まさに美術文化の普及に絶大な貢献をしたと言えるだろう。

2003年10月、岡田芳保は煥乎堂を66歳で定年退職した<sup>28)</sup>。パブルが崩壊し、美術品が以前のように売れなくなったという時代の影響もあったが、博学的知識と膨大な人脈を持ち、抜群の説得力と押しの強さで経営に邁進した岡田の引退は、少なくともギャラリーの運営には大きな痛手となった。

岡田の退職から1年余り経った2005年2月26日付上毛新聞に「創業一族が退任、本店ギャラリー閉鎖へ」の見出しが躍った (fig.23)。経営不振に陥っていた煥乎堂が、経営再建を本格化させ、社長は高橋元理から小林卓郎へとバトンタッチし、創業以来の高橋一族は全ての経営から退くことになった事を伝え、併せてギャラリーの閉鎖も宣言された。

高橋家を経営から退かせることは、再建に大きな責任を負った銀行側からの要請だったようだ。それ程までに思い切った合理化を求められていたのだ。

ギャラリー閉鎖もこの流れの中にあった。火中の栗を拾う役割を引きうけた小林卓郎は、小林二郎の息子で磯貝憲佑の孫にあたる。結果として、高橋家を追い出したかのように見えるこの選

択に、どれほど小林家が苦悩したかは矢来神三の「活字シアター」に詳しく記されている。結局、どれだけ犠牲を払っても、煥乎堂を存続させることこそが高橋家の名誉と名声を守ることだと割り切るしかなかった。

この新聞記事から2ヶ月後の4月23日、ギャラリー最後の展覧会「煥乎堂収蔵作品展」が始まった。会期は5月1日まで。冒頭にも記したが、このとき上毛新聞4月24日付11面には「地域文化の発信に幕」という記事が載った (fig.24)。煥乎堂に収蔵されている60人約100点の作品が会場に並んだが、当時96歳で健在だった松本忠義の作品や、高田博厚

が制作した親友の高橋元吉の胸像などが目を引いた。

実はこの年には、ギャラリーの閉鎖だけでなく、それまでの煥乎堂の文化的イメージを引き出していた二



fig.24

つの事柄にも終止符が打たれていた。ひとつは38年の歴史を刻んだ高橋元吉文化賞の終了だった<sup>29)</sup>。この賞は、元吉没後に詩碑建設で集められた資金の余剰金を基金として1966年にスタートし、最初の6年間は優れた詩人に対して贈られ、1973年からは文学、芸術、研究などの文化一般を対象として選ばれてきた。美術部門でも、豊田一男、清水刀根、中村節也らが受賞している。

もうひとつは、白井晟一設計の旧店舗が解体されたことだ<sup>30)</sup>。この建物は1993年に現店舗が建てられた際に、既に人手に渡っていたが、1階部分が車庫として使われていたためこの年まで残っていた。この建物の特徴付けていた中央のらせん階段部分は、もっと早く壊されており、建築の価値としてはかなり減じられていたものだが、建物そのものが完全に人々の視界から消えたことは淋しさを禁じ得なかった。

高橋元吉文化賞の終了も旧店舗の解体も、ギャラリーの閉鎖同様それぞれにやむを得ない事情があったもので、当事者でもない我々が騒ぎ立てるのはど



fig.23

うかと思う。それでもこの2005年は、ひとつの時代が終わったという印象を強くした年だった。とは言え、煥乎堂自体はまだ存在し続けているのであって、書籍の販売や刊行、音楽文化の普及という役割は今でも背負い続けている。今後も、新しい時代に相応しい活動を見せてくれるに違いない。

## 5. おわりに

本稿では、煥乎堂ギャラリーを語る際の前提となる煥乎堂の歴史について述べ、歴代の経営者とその人物像についても触れた。煥乎堂の歴史と存在自体をひとつの文化と捉える考え方があるが、それには代々の経営者が持っていた文化人としての顔の存在が大きいと思われ、それらの人々に触れずには済まされなかったからだ。

ギャラリーで開催された展覧会の記録の収集は、今回の調査の骨幹となったものだ。現時点で1,000項目に届く記録を集めており、その現状を全て記載することも考えたが、あまりに膨大であり、今後の調査の進展を考慮すれば、現状の中途半端な状態で記載するのは時期尚早と判断した。それよりも、その舞台となったギャラリーの歴史に焦点を当てて、本稿を構成した。

文中、1993年の展覧会一覧を記載したが、月に3回平均と想定すれば年36回の展覧会となり、10年で360回、岡田芳保が勤務した1965年から2003年までの38年間だけでも優に千回を超すことになるだろう。月平均3回のペースが最初から続いたわけではないが、ギャラリーだけでなくホテルなどを会場として行った大掛かりな展覧会もあり、1990年代末頃からは群馬町（現高崎市）の支店にもギャラリーが作られて盛んに展覧会が開かれていた。現状では1950年代から60年代の記録が乏しいのだが、これら全ての展覧会の情報をできる限り収集して、記録にとどめ、公開するのが必要だと考えている。

数多く開催された展覧会の中でも、2005年まで毎年開かれた煥乎堂美術展は45回を数えた。これは県内で活躍する作家を中心に開催された企画展で、20名から多いときでは30名に達する画家や彫刻家が選ばれ、各人数点の作品を出品したもので、新春の恒例事業となっていた。正月の2日から開催されるのが常で、新年の挨拶を兼ねて煥乎堂ギャラリーに顔を出すのが1年の始まりだった。この煥乎堂美術展の記録を精査するだけでも、県内画壇のある種

の動向は見えてくるだろう。

また、2003年で33回を数える一元会展は、高田博厚が1971年にスタートさせた彫刻を主としたグループ展で、本県とは直接関係ない作家がほとんどだったが、記憶に残るものだった。これは当時既に故人となっていた高橋元吉への高田博厚の友情の展覧会と呼べるもので、この展覧会に足を運ぶときには元吉を思い出すのが常だった。後には、絵を趣味としていた社長の高橋徹や、その娘の里枝子も出品するようになり、高田博厚が亡くなくても展覧会は続いた。本展は、煥乎堂ギャラリーが無くなった後も、会場を東京の画廊に移して毎年発表を続け、昨年で第46回を数えている。出品作家の中には、本展が縁で群馬に移住してしまった熊井淳一のような作家もいる。

それぞれの展覧会には人々の思いと歴史が詰まっていた。そのひとつひとつを訪ね歩くのは、これからの課題であり、楽しみでもある。

（元 群馬県立近代美術館学芸員）

- (1) 上毛新聞2005年4月24日付11面
- (2) 高崎の音楽喫茶「あすなろ」(1956～82)を偲ぶ会として2001年に始まった催しで、毎年「あすなろ」に関係した講演や演奏が開かれている。なお「あすなろ」は、高崎市の財政援助で高崎経済大学の学生が運営するコミュニティカフェ「caféあすなろ」として2013年6月に復活した。
- (3) 旧井上房一郎邸。現在は、高崎市美術館の附属施設として公開されているが、2007年当時は、井上が設置を目指していた高崎哲学堂として活用されていた。
- (4) 2012年度のアーツ前橋プレイベント、アーツスクールEコース「アートな出来事を記録する」に際して、講師として招かれた染谷滋が始めた年表作り。ただし、染谷の最終目標は「前橋美術文化年表」を含む「群馬県美術文化年表」にある。
- (5) 煥乎堂ギャラリーと同じく、戦後の前橋市で重要な役割を果たしたギャラリーに東電サービスセンターがある。1960年代から70年代にかけて盛んに使われた施設で、今でも空き店舗のまま千代田町の銀座一丁目通り北側に現存している。以前、ここの記録を求めて東京電力前橋支社を訪問したことがあったが、ギャラリーに関する記録は得られなかった。大企業にとって、本来業務ではないサービスとしての片手間な文化事業を、記録にとどめるような手間暇はかけられないのだろう。
- (6) 矢来神三「活字シアター」371話、週刊読書人2010年9月3日
- (7) 『前橋風 第2号』（特定非営利活動法人まやはし、2016年）は坂梨春水が執筆した『郷土研究』（上毛新聞社、1914年）の復刻を試みているが、この中で野本文幸が「社会解剖」の筆者を坂梨春水と推定している。私も同意見である。
- (8) 『日本の書店百年』（尾崎秀樹・宗武朝子編、育英舎）は1991年に出版されたものだが、元となったのは日販（日本出版販売株式会社）が出していた「日販通信」であるらしい。その元々の出典が確認できていないため、再録

- されているインタビューが何年に行われたものか不明なのだが、語っているのは当時の社長・高橋徹、専務・磯貝憲佑、参事・大塚隆三である。少なくとも、磯貝が亡くなる1979年以前のものであることは間違いない。
- (9) 『高橋元吉の人間』(煥乎堂、1975年) 263頁
- (10) 『高橋元吉の人間』(煥乎堂、1975年) 300頁。ただし、矢来神三の「活字シアター」では磯貝の復帰を1950年としている。
- (11) 白井晟一(1905～1983)は京都出身の建築家。戦後のモダニズム建築全盛の時代に、哲学的と称される独自の様式を確立。1961年の高村光太郎賞をはじめ、1969年日本建築学会賞、1970年毎日芸術賞、1980年日本芸術院賞など受賞多数。書や随筆にも優れる。群馬県内では、煥乎堂の後の1956年に建てられた旧松井田役場が、白井の作品として現存している。白井に設計を頼んだのは「高崎出身のある彫刻家の紹介」と矢来神三は記しているが(「活字シアター」403話)、それが誰のことなのか確認できていない。
- (12) 高崎の新町(あら町)に本店があった江戸時代から続いた老舗の料亭。高崎には柳川町や高崎公園内にも店を出した。前橋にも「前橋岡源」が馬場川通りの南側にあり、空襲で焼けた後、現在のアーツ前橋の場所に移転していた。元吉が白井晟一と食事を共にしたのは、この前橋岡源のことだろう。
- (13) 上毛美術展は上毛新聞社が主催して1927年から開催した公募展。日本画、洋画、彫刻、工芸、書、篆刻の各分野に及び、当初は素人のための展覧会を謳ったが、次第にセミプロ化し、審査員などのプロも参考出品したため、戦後の県美術展(県展)を思わせる内容だった。毎年秋に10年間続いたが、日中戦争の勃発で1937年に中断。昭和初期の前橋を中心とした群馬県内の美術状況を語る際には、この上毛美術展の精査は必要だと思われるが、今日まで行われていない。
- (14) この挿絵のコレクションはその後高橋家に残ったようで、上毛新聞1971年7月5日付3面にこの資料の記事が載っている。それによると、高橋清七の息子・穰(当時62歳)が保管していて、1932年から36年までの5年間で1万数千枚あるそうだが、戦災で焼けたものも多く、実際にはもっと大量にあったらしい。挿絵だけを切り抜いて作家別に小箱に収納してあるため、肝心な小説の作家や作品名が分からないのが難点だとある。この記事から既に50年近くが過ぎているので、現存しているかどうかは分からない。
- (15) 塚本茂(1903～1983)は多野郡美土里村(現在の藤岡市)に生まれ、前橋で育った画家である。旧制前橋中学から東京美術学校(現在の東京芸術大学)図画師範科に進学。在学中は藤島武二や田辺至に学び、学外でも中村彝や牧野虎雄に師事した。美術学校在学中の1924年に第5回帝展に初入選し、以後帝展や新文展の常連となる。卒業後、神奈川県立湘南中学校(現在の湘南高校)の教師となり鶴沼に住んだ。湘南中学では山下大五郎や石川滋彦を育てた。戦後は画業に専念したが、鶴沼で「塚本画塾」を開き、藤沢市美術協会を創立。郷里群馬でも戦前の群馬美術協会結成に尽力し、頻繁に個展をするなど、地域的美術振興に力を注いだ。
- (16) 住谷磐根(1902～1997)は群馬郡群馬町(現在の高崎市)に生まれ、旧制勢多農林学校を卒業後上京。村山知義が結成した「マヴォ」に参加。1923年の二科展にイワノフ・スミヤヴィッチの名で入選した作品を撤回する騒動を起こす。翌年には三科造形美術協会の創立にも参加し前衛劇などを行う。1927年、それまでの前衛絵画を捨て牧野虎雄に師事して槐樹社展に出品。従軍画家としての経験

- を経て「東洋画」を目指し、戦後の1963年からは大調和会に出品して日本画委員をつとめた。県内での個展多数。
- (17) 清水刀根(1905～1984)は前橋市に生まれ、旧制前橋中学を経て日本美術学校洋画科を卒業。太平洋画会、白日会、1930年協会などの展覧会で入選・受賞を重ね、1931年の二科展では二科賞受賞。翌年、二科会会友に選ばれたが、兄が亡くなり帰郷。1934年前橋で青研社を起こし、多くの後進を育てた。1943年から二科会会員。群馬美術協会結成にも参加し、戦後はその中心的存在として1950年の県美術展創立に尽力。1950年から70年まで群馬大学教授。前橋美術界の「ボス」とまで呼ばれたことがある存在で、清水の画業と人脈を追うことは今後の課題となるだろう。
- (18) 群馬美術協会は、東京在住の群馬県出身作家が中心となって結成された団体で、小室翠雲を会長として、日本画、洋画、彫刻、工芸の各分野の作家が参加した。東京と群馬での展覧会開催を目的としたが、2年目からは群馬での公募展が活動の中心となった。戦争の激化と共に戦前の活動は長く続かなかったが、戦後もいち早く再開して1950年から始まる県美術展の土台となった。1968年には群馬県美術会に組織変更され、今日に至っている。拙稿「群馬美術協会覚書1941～1949年」(群馬県立近代美術館研究紀要第5号、2009年)、ならびに、「群馬の美術1941～2009 ―群馬美術協会の結成から現代まで―」(群馬県立近代美術館展覧会図録、2009年)参照。
- (19) 上毛新聞1951年1月17日付夕刊2面。
- (20) 上毛新聞1951年1月24日付夕刊2面「正月の洋画展」。庭山政次(1907～1986)は戦前上毛新聞社の記者を勤め、戦後は日本経済新聞社の前橋支局長だった。評論家の肩書きを愛用し、とりわけ県内の美術に精通していた。群馬県立近代美術館友の会の初代会長も務めた。
- (21) 『高橋元吉の人間』(煥乎堂、1975年) 268頁。
- (22) 近忠(1917?～1964)は戦前から群馬県内で活躍していた漫画家。漫画といっても現代のストーリー漫画とは異なり、もっぱら新聞雑誌の紙面での一コマ漫画(タブロー漫画)や四コマ漫画である。戦後の上毛新聞で1950年3月1日から5年余り連載した「弱井真三」が代表作。戦後、横山隆一らとNLC芸能社を設立したが、解散後郷里に戻って上毛新聞社の嘱託として活動。近忠漫画研究所を作って後進を育成した。二科会に漫画部が設置されると1952年ここに出品、1961年の漫画部解散まで常連だった。1954年群馬美術家連盟にも漫画部が作られ会員推挙。癌のため47歳で死去。1966年11月11日から13日まで、前橋・やまだや画廊で遺作展開催。
- (23) 『写真アルバム 前橋市の昭和』(いき出版2012年)では、同じ写真を昭和30年代としている。
- (24) 上毛新聞1955年10月29日付3面「鮮かに秋を彩る、前橋でラ・ボンヌ、二紀展」。
- (25) 現在「骨董舎」が入居しているスペースがメイン会場の「ギャラリー1」、その入口周辺のコーナーが「ギャラリー2」とされていた。
- (26) 岡田芳保は退職後、群馬県立図書館長と群馬県立土屋文明記念文学館長の要職に就いた。現在は公職を去り、住谷夢幻のペンネームで書表現の創作活動に情熱を燃やしている。
- (27) 上毛新聞2005年1月14日付20面に「高橋元吉文化賞、38年の歴史に幕」という記事が掲載されている。
- (28) 上毛新聞2005年3月12日付22面に「消えた文化遺産」の見出しで取り上げられている。

# 挿図説明

- fig. 1 高橋常蔵（『日本の書店百年』育英舎1991年より）
- fig. 2 上野新聞1883年3月13日付4面より
- fig. 3 上野新聞1883年4月14日付4面より
- fig. 4 煥乎堂店舗明治期（『写真集 前橋』図書刊行会1979年より）
- fig. 5 高橋清七
- fig. 6 煥乎堂店舗1921年1月（『写真集 前橋』図書刊行会1979年より）
- fig. 7 上毛新聞1925年12月21日付2面より
- fig. 8 煥乎堂楽器部前の集合写真、1937年（『目で見える前橋の100年』郷土出版社2006年より）
- fig. 9 高橋元吉（1960年、高橋徹撮影）
- fig.10 終戦直後の前橋市内（『写真集 前橋』図書刊行会1979年より）
- fig.11 白井晟一設計の店舗、1953年（『目で見える前橋の100年』郷土出版社2006年より）
- fig.12 旧店舗の吹き抜け（『白井晟一全集』同朋社1988年より）
- fig.13 高橋徹（『日本の書店百年』育英舎1991年より）
- fig.14 磯貝憲佑（前掲書より）
- fig.15 煥乎堂音楽センター
- fig.16 上毛新聞1931年10月1日付2面より
- fig.17 上毛新聞1938年9月11日付2面より
- fig.18 上毛新聞1938年12月2日付2面より
- fig.19 煥乎堂店舗、1950年頃（『写真集 前橋』図書刊行会1979年より）
- fig.20 「積田鯉土展」会場、1976年12月9日～14日
- fig.21 「八人の創造者展」会場、1991年5月23日～6月4日
- fig.22 現在の煥乎堂本店
- fig.23 上毛新聞2005年2月26日付17面より
- fig.24 上毛新聞2005年4月24日付11面より





アーツ前橋 研究紀要 第1号

2018年3月31日発行

編集・発行 アーツ前橋

印刷・製本 上毎印刷工業株式会社

© Arts Maebashi Bulletin No.1 2018

Photo © 木暮伸也 P14、P16、P21、P23、P24